

修士学位論文

中華圏における鯨文化について

—なぜ中国では大規模な捕鯨が行われていなかったのか—

2021 年度

(2022 年 3 月)

東京海洋大学大学院

海洋科学技術研究科

海洋管理政策学専攻

馮 子卓



修士学位論文

中華圏における鯨文化について

—なぜ中国では大規模な捕鯨が行われていなかったのか—

2021 年度

(2022 年 3 月)

東京海洋大学大学院

海洋科学技術研究科

海洋管理政策学専攻

馮 子卓

# 目次

## 第一章 はじめに

1. 研究対象と目的-----	1
2. 研究方法-----	2
3. 中国の鯨類資源の現状-----	3
4. 台湾の鯨類資源の現状-----	4

## 第二章 中華圏における鯨の利用

2.1. 古代鯨利用史-----	5
2.2. 鯨座礁について-----	8
2.3. 近代における捕鯨-----	11
2.4. 捕獲量について-----	12

## 第三章 民間伝承、物語

3.1. 中国大陸-----	16
3.2. 台湾とその他の閩南地方-----	17

## 第四章 なぜ中国では大規模な捕鯨が行われていないのか

4.1. 中国政府の捕鯨に対する立場-----	23
4.2. 歴史と地理的背景-----	27
4.3. 鯨食文化について-----	30

## 第五章 考察

5.1. 鯨食文化の保全について-----	34
5.2. 文化論の役割とその限界-----	35
5.3. 総括-----	39
5.4. 今後の課題-----	41

日中くじら用語-----	42
--------------	----

参考文献-----	43
-----------	----

参考サイト-----	44
------------	----

## 第一章 はじめに

### 1. 研究対象と目的

『北海出大魚』は漢書<sup>1</sup>からの一節であるが、「渤海から大魚が出てきた」という意味で、昔から鯨がしばしば浜辺で座礁していた最も古い記録である。当時の人々は、クジラは巨大で神秘的な生物と認識していた。この記録では、座礁鯨の時間、場所が明確であり、海洋史の研究に大きな価値を持つものである。中国では古くから鯨に関するさまざまな文献が残されている。とくに明・清時代においては、南の沿岸部の地方府志により、鯨油は漁業税として宮廷に供給されたと記録されている。

島国である日本では、縄文時代の遺跡からイルカの骨が大量に出土した。江戸時代初期、日本人は組織的な捕鯨を始めたとされる。同じ時期は、中国では明朝の嘉靖の頃であった。当時、中国の政治の中心は北京であり、海には隣接していない。他方、歴代の王朝は黄河、長江中下流域に集中しており、黄河、長江における淡水漁業が中国の伝統的な漁業の中心である。中国の伝統漁業は「四大家魚」<sup>2</sup>を中心に家庭を単位とした淡水養殖漁業で構成され、数千年前から続いていた。

第一次産業革命に突入した後、灯油や潤滑油としての鯨油の需要が大きくなり、世界各国が競って使用するようになった。1859年にアメリカの事業家がペンシルバニアで油田を開発したことで石油産業の革命が始まり、鯨油は舞台から姿を消した。同時期の中国も大規模な捕鯨は行っていなかった。

中国は、1980年に国際捕鯨委員会（IWC: International Whaling Commission）<sup>3</sup>に加盟し、1997年から2012年までのIWC決議の投票結果<sup>4</sup>によれば、中国政府が捕鯨に反対していないことが明らかであるが、2012年以降、中国政府はIWCでの投票に参加していない。また中国国内では、公式メディア（中国国家テレビ局）はよく反捕鯨の立場を表明している。したがって、中国政府の捕鯨に対する姿勢は非常に曖昧である。

従来の研究において、中国国内の捕鯨情報の不足により、鯨にまつわる伝統文化の情報の公開が少ないのである。本稿の目的は、主に古代及び近代中国における捕鯨活動を考察

---

<sup>1</sup> 《漢書》 卷二七《五行誌中之下》

<sup>2</sup> 四大家魚とは、青魚（アオウオ）、草魚（ソウギョ）、鱧（ハクレン）、鱖（レンギョ）

<sup>3</sup> 本稿では、国際捕鯨委員会（IWC: International Whaling Commission）として「IWC」という名称を用いる。

<sup>4</sup> Commission Meeting Voting Records - IWC | Archive

(<https://archive.iwc.int/pages/search.php?search=%21collection29772&k=>)

することである。また、過去 IWC で中国政府の捕鯨に対する立場の表明に基づき、将来の日本の地域捕鯨政策を助言することである。

第二次世界大戦後の日本では、食糧不足の危機に瀕し、その状況への対処の一環として、鯨の捕獲量が大幅に増加した。当時の鯨肉は重要なタンパク質源となり、日本の国民を食料危機から救ったと言われている。他方、IWC が 1982 年の商業捕鯨モラトリアムの採択によって商業捕鯨を禁止して以来長い年月が経過し、その結果、鯨肉の消費市場が実質上崩壊した。しかし、現在では、日本の和食は独自の食文化として、世界からも注目をあつめている。鯨食は伝統的な日本食であり、日本の食文化の普及は、鯨食文化にもインパクトを与えるだろう。また、中国の国力発展に伴い、食の大国に暮らす中国人は、富裕層のみならず、社会全体で日本食の探求に関心を高め始めている。近年日本を訪れる中国観光客数は、国別観光者数で第 1 位となった。しかし、2020 年以降、新型コロナウイルスの蔓延により、観光業への影響は深刻なものとなっている。本稿執筆時点では、コロナ禍の終わりはまだ見えないが、近い将来人々の生活がかつてのように戻ることが期待される。

## 2. 研究方法

中華圏（主に中国大陸、台湾）<sup>5</sup>における捕鯨史、あるいは鯨の利用史に関連する文献調査を行う。この分野については、従来中国の捕鯨活動に関する情報の欠如のため、まだ十分な考察がなされていない。また、捕鯨に関する中国政府の現在の立場は曖昧であり、その解明も求められている。

この論文では中国の歴史に関する資料を多く使用しており、古文や複雑な漢字を用いるため、すべての史料が論文に整理されているわけではない。また、歴史的なテキストの解釈には研究者によっても違いが生じる可能性があるため、本論文はさまざまな研究者の結論の比較に基づいて分析する方法となっている。

---

<sup>5</sup> 中華圏とは、通常は漢民族が多数者として定住しており中国語が主要な用語となっている中国、香港、マカオ、台湾の各地区を指し、中国語圏とも呼ばれる場合もある。本稿では、中華圏の定義は、中華人民共和国と中華民国台湾とする。両者の政治的な区別は論述しない。



研究の対象は遼東半島。台湾と澎湖諸島、雷州半島である。

### 3. 中国の鯨類資源の現状<sup>6</sup>

中国の科学者による鯨類の系統的なモニタリングは、1978年に長江のヨウスコウカワイルカ (*Lipotes vexillifer*) とスナメリ (*Neophocaena asiaeorientalis*) の両種の研究から始まった。中国のヨウスコウカワイルカに関する研究の基礎は、1960年代半ばから1980年代初頭にかけて行われた、「ピンクイルカ」と呼ばれる中華白イルカ、すなわち、シナウスイロイルカ (*Sousa chinensis*) に関する基礎研究によって築かれ、現在に至っている。したがって、中国における鯨類の保護は、主にこの3種類のイルカに焦点が当てられてきた。

2021年12月に日本哺乳類学会が発行した「世界哺乳類標準和名リスト2021年度版」<sup>7</sup>によると、鯨類は世界に95種、ヒゲクジラが15種、ハクジラが80種存在する。中国における鯨類研究の最初の記録は、Osbeck<sup>8</sup> (1765年) が珠江で中華白イルカ (*Sousa chinensis*) を発見したことに端を発し、各種類のイルカの命名が始まった。その後、1920年代に、中国の動物学の先駆者である丁海教授が中国浙江省の定海に生息するマッコウクジラ (*Physeter macrocephalus*) の座礁事件を報告した。現在まで、中国海域には約38種の鯨

<sup>6</sup> 野生动物保护协会『中国鲸类多样性及保护现状』腾讯网2021年1月31日 (<https://xw.qq.com/amphtml/20210130A022RS00>) から引用

<sup>7</sup> 日本哺乳類学会2021/12/24 (<https://www.mammalogy.jp/list/index.html>)

<sup>8</sup> Pehr Osbeck『Dagbok öfwer en ostindisk Resa åren』

類が分布しており、その中にはヒゲクジラ亜目 (*Mysticeti*) の 4 科 9 種とハクジラ亜目 (*Odontoceti*) の 6 科 20 属 29 種が含まれている。現地調査の拡大や科学的研究の継続により、中国に分布する鯨類の数は増加すると思われる。中国の沿岸部や長江中下流域には 22 の保護区が設置されており、そのうちの 9 つが中華白イルカ保護区、12 がヨウスコウカワイルカと長江ネズミイルカ保護区、1 つが鯨類保護区となっている。

#### 4. 台湾の鯨類資源の現状

台湾は、東に太平洋を臨み、西には台湾海峡、南は南シナ海に面している島国であり、地理的に独特な位置にあり、様々な海流の影響を受けている。黒潮、中国沿岸海流、北東モンスーン海流、南西モンスーン海流などの海流によって、貴重な鯨類資源を含むさまざまな海洋資源が非常に豊富である。台湾周辺海域には少なくとも 32 種の鯨類が生息しており、世界の鯨類 95 種の 3 分の 1 以上を占めている<sup>9</sup>。1990 年以降、台湾はクジラやイルカの捕獲を禁止し、すべてのクジラ類の保護に移行した。クジラとイルカは漁業資源から観光資源に転換された。

台湾近海でのホエールウォッチング活動と鯨類分布状況の概要は以下の通りである

##### (I) 宜蘭県

宜蘭のホエールウォッチングは亀山島周辺に集中しており、ホエールウォッチングの観光地は亀山島の周辺海域である。調査によると、宜蘭県の沿岸には約 10 種の鯨類が生息しており、ハシナガイルカ (*Stenella longirostris*) が主な種である。

##### (2) 花蓮県

現在、花蓮海域では 20 種以上の鯨類が確認されており、主な鯨類としては、ハナゴンドウ (*Grampus griseus*)、マダライルカ (*Stenella attenuata*)、ハシナガイルカ (*Stenella longirostris*)、サラワクイルカ (*Lagenodelphis hosei*) などが生息している。世界の鯨類 95 種のうち 20% が花蓮海域で記録されている。

##### (3) 台東県

台東海域には約 18 種のクジラ類が生息しており、主にハナゴンドウ、マダライルカ、ハシナガイルカ、サラワクイルカなどである<sup>10</sup>。

<sup>9</sup> 国立臺灣海洋大學「108 年度臺灣周邊鯨豚族群調查計畫」2019 年 12 月 19 日、p. 1。

<sup>10</sup> 行政院農業委員會「台灣賞鯨事業發展及展望」2022 年 1 月 24 日

## 第二章 中華圏における鯨の利用

### 2.1. 古代鯨利用史

クジラに関する文字による最も古い歴史的記録は、中国の『漢書』であるが、発掘された有形文化財は殷<sup>11</sup>の時代にまで遡る。殷の時代には、人々が鯨を利用していたことがわかっている。殷王朝が骨に文字を刻むことによって、吉凶を占うことを行われる。また、当時の重要な祭典を記録するものとしても使われていた。



河南省安陽殷墟から発掘された鯨骨 殷王朝後期 出典「中国国家博物館」

鯨油が灯油に使われるようになったのは、秦の時代であるであり、「始皇墓中、燃鯨魚膏為灯」<sup>12</sup>という記述がある。古代中国では重要な灯火用燃料として使われ、沿岸の漁民によって「脛船」<sup>13</sup>という使用法もあった。鯨油の出所と使用量に関する記録はあまり明確にされておらず、記載が多いのは明清の時代のものである。中国では明代以降、鯨油の使用量が徐々に増加し、明時代の地方府志によれば、洪武年の雷州府が毎年の鯨油の供給量のトップになったという。その量は3184斤<sup>14</sup>に達した。しかし、この記録は当時から組織的な捕鯨が始まったことを証明するものではなく、明清時代には鯨の座礁の記録が数多く残っていることから座礁した鯨の利用による可能性もある。他方、研究者の駱和国<sup>15</sup>によると、明朝中期から清朝にかけて、広東省雷州府での捕鯨は最盛期を迎え、1日に100

<sup>11</sup> 商朝とも呼ばれる。紀元前17世紀頃 - 紀元前1046年

<sup>12</sup> 「始皇帝の墓では、鯨油が灯油として燃やされている」《太平御覽》卷八七〇引《三秦記》

<sup>13</sup> 脛船とは、船を維持、管理する伝統的な手作業。鯨の油に麻、石灰などを混ぜ、船に塗る。防水や木の割れ止めなどの効果がある。

<sup>14</sup> 明朝1斤 = 590g、約1.9トン

<sup>15</sup> 駱和国『湛江捕鯨史話』「湛江日報」2008年1月15日

[http://szb.gdzdaily.com.cn/zjrb/html/2008-01/15/content\\_1261633.htm](http://szb.gdzdaily.com.cn/zjrb/html/2008-01/15/content_1261633.htm)

隻以上の捕鯨船が海上を航行し、鯨の捕獲量が飛躍的に増加したため、鯨油が市場に出回るようになったという。この記事には、それを裏付ける文献が少ないため、信憑性をさらに検証する必要がある。しかし、このようなさまざまな情報は、少なくとも明朝中期に雷州半島で捕鯨が開始されたこと、あるいは座礁した鯨の利用が行われていたことを示している。

また、龍涎香は古代中国では非常に重要な香辛料であり、その貴重性は名称を見ればわかるよう。龍という名前が付けられたのは皇帝、王子しか使わない物という意味である。乾隆帝の30年（1765年）、「小琉球漫誌」は<sup>16</sup>龍涎香について、こう説明した。「上淡水出龍涎香，每一粒價兼金；云可為房術用，甚為難得。聞欲辨真偽，取香細搽，入冷水，香氣盈室；去水而香輕重毫忽不耗，乃為真者」（要約：上淡水（今台湾の高雄、北屏東の近辺）の龍涎香は、一粒あたりの価値が金と同等で、龍涎香のお香が養生術として使用されている。真偽を区別したい場合は、龍涎香を取り、細かく研磨し、冷水に入れると、その香りが部屋中に充満している。水が乾いても、香りが減らないのは本物である）。そのほかにも、各地の年代記には、中国の各王朝で龍涎香が皇帝に献上されたという記録がいくつも残っている。

16世紀、ヨーロッパの女性の服装は、スカートが大きくたっぷりしたものになり、シルエットを作るために上半身を補正する「ボディス」と呼ぶ下着を身に付けた。ボディスは麻キャンバス地で作られ、張り骨で補強されており、張り骨の素材は鯨のひげなどの物を使用した。鯨のひげは東洋でも様々な利用法がある。日本では扇子、呉服尺、ぜんまいばね、文楽人形など幅広い用途に使用されている。中国の唐の時代には鯨骨を屏風にした。

「海州土俗工畫、節度令造海圖屏風二十合。予時客海上、偶於州門見人持一束黒物、形如竹篾。予問之。其人云、海魚腮中毛、擬用作屏風貼。因問所得。云、數十年前、東海有大魚死於岸上、收得此。惟堪用為屏風貼、前後所用無數。今官造屏風、搜求得此。奇文異色、澤似水牛角、小頭似猪鬃、大頭正方、長四五尺、廣可一寸、亦奇物也。今人間大魚腮中鬚毛長不盈寸、此物乃長四五尺、魚亦大矣。」<sup>17</sup>

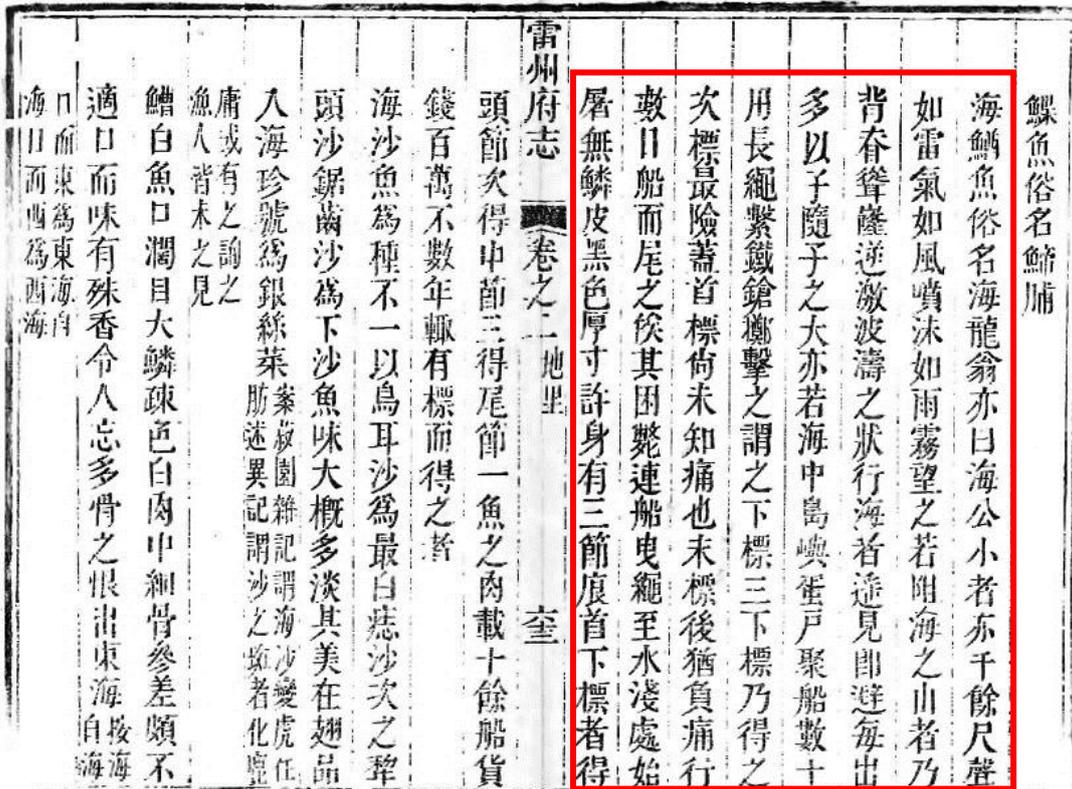
（要約：海州は現在の江蘇省の北に位置する。海州の地元の民芸と絵画の祭典では、海図の屏風を20枚に作成するように命じされた。著者の唐封演は、海州の匠が大きな魚の腮を持つのを目撃し、その腮は黒く、竹の子の皮のような形をしており、長さは四、

<sup>16</sup> 『小琉球漫志卷七』

<sup>17</sup> 『封氏聞見記卷八・大魚腮』

五尺である。地元住民によると、数十年前に上陸した大型魚の体から取られ、「屏風」として使われるようになる。)

捕鯨法について、歴史的な資料では、古代中国における捕鯨の記録は南部に集中している。その方法については、当時の人による突取捕鯨の流れが清朝嘉慶時代の『雷州府志』<sup>18</sup>に記されている。



「聚船數十、用長繩繫鉄槍擲擊之謂之下標三下標乃得之、次標最險蓋首標尙未知痛也未標後猶負痛行、數日船而尾之矣其困斃連船曳繩至水淺處始屠」

(要約：10人が船頭に集まって立ち、長い縄のついている槍で鯨を刺す。これは下標という。普通は3回ほど（鯨に槍を刺して）仕留めることができる。ただし、2回目に刺す際はもともと危険で、1回目に刺した時に鯨に痛みを感じさせてはいけないのである。最後の一撃を刺した後、鯨は痛みを我慢して進み、数日後に死んでしまう。)<sup>19</sup>

<sup>18</sup> 『雷州府志卷二六十三海鱈』

<sup>19</sup> 『明清時代の中国における鯨資源の利用』 p. 12

## 2.2 鯨座礁について

中国沿岸には多くの種類のクジラ類が生息している。西洋動物の分類法が導入される前には、統一された命名規則がなかったため、鯨類の頭部の特徴や大きさによって、神話や伝説との関連性に基づいて、各時代で不規則な名前が付けられてきた。中国で現存する最も古い鯨座礁の記録は、漢時代のものであり、また、現在収集できる鯨座礁の事例のほとんどは、明朝中期以降のものである。これは、主に明と清の時代に他の時代と比較して多数の事件が発生したことを意味するのではなく、文献の数と記録者の記録傾向の影響を受けたことである。また、クジラには資源量の増減の可能性がある。このようなデータ条件は、調査の統計結果の不正確さにもつながった。入手可能な文献に記載されている鯨類の座礁の定量的統計は、気候変動、火山、地震活動との関係を実際には反映していない。

各地の文献では、座礁鯨の最盛期が鯨の出産期、毎年の春の2月～3月であることが反映されている。しかし、各地方で調査して得られた件数は、南シナ海を除いて、この最盛期とは一致していないのである。このような現象は、記録が断片的であることに加え、各地の文献による座礁鯨を記録する傾向の違い（例えば、東シナ海ではより頻繁に記録され、その結果、座礁の季節的な分布がより均等になっているが、華南地方では記録される頻度が低く、散発的に得られている。数少ない記録は春に集中する傾向がある）と関係していると考えられる。したがって、鯨が座礁する時期と記録の傾向の関係をさらに調査する必要がある。座礁場所としては、長江、黄河などの河口が最も多くなっている、これはおそらく河口域には豊かな漁場、プランクトンが存在し、採餌行動が座礁につながる可能性が高くなっているのである。また、河口の広い地域（杭州湾など）で発生する潮汐力（潮の満ち引き）も鯨の大量座礁の重要な原因だと考えられる。

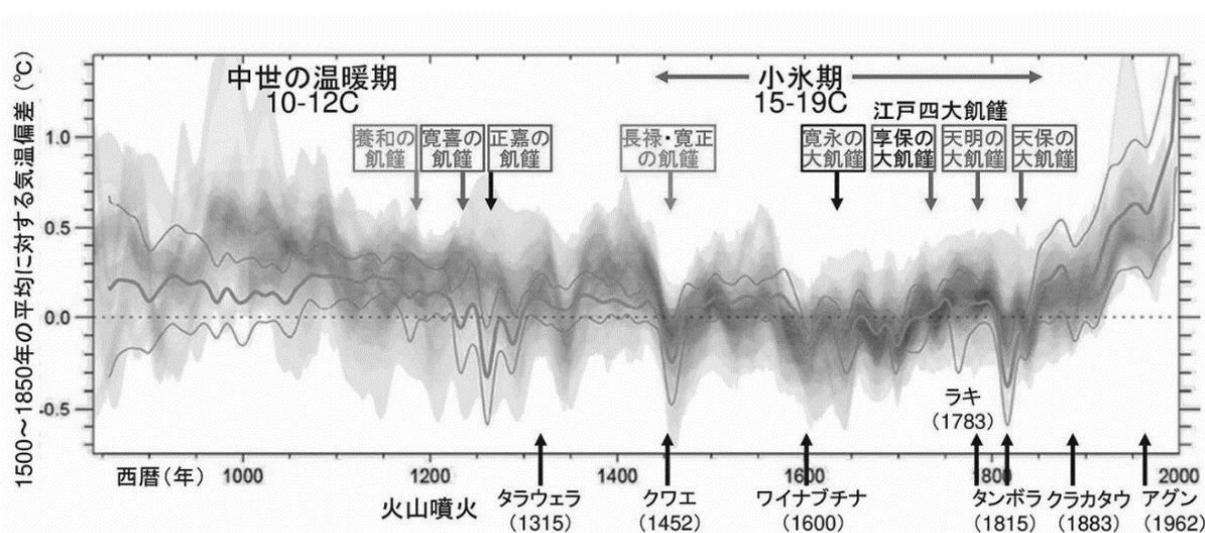
邱仲麟（2019）<sup>20</sup>によると、地方の年代記、府志、文学的な記事などのさまざまな歴史的資料を参照した結果、中国の歴史上で鯨類の座礁の記録が確認されたのは合計176件であることが明らかにされた。統計によると、記録されたクジラが座礁した件数が1281年から1911年の間に比較的集中していた。その中で、東シナ海の座礁数が112件で最も多く、また、座礁は東シナ海の北部に集中しており、明の嘉靖時代（1522年頃～1566年頃）以降はほとんど途切れることなく続いていた。彼の分析によると、東シナ海は他の海に比べて海岸線が長く、長江の河口と钱塘湾が交わる中国最大の漁場があり、プランクトンや魚

---

<sup>20</sup> 「講座 | 邱仲麟：中国历史上的鲸豚搁浅」复旦大学 2019年11月29日。

介類の資源が豊富で、鯨類が回遊しやすい環境である。また、東シナ海沿岸の記録が他の地域よりも多い可能性も否定できず、史料の残存状況も含めて検討する必要がある。

日本の捕鯨の歴史を見ると、日本では組織的な捕鯨は1606年「明萬曆三十四年」に始まった。太地（和歌山）で「鯨組」による組織的な捕鯨が始まる。大型のクジラに対しての突き取り式捕鯨（銚ではなく矛であった）が最初に行われたのは1570年頃の三河国であり6~8艘の船団で行われていたとされる<sup>21</sup>。中国と日本は、捕鯨の時期において驚くほど一致していたことは偶然であろうか。



出典「港区史 自然編」

当時の中国と日本の社会的背景に基づいて分析すると、一般的には15世紀半ば以降のおよそ400年間は全球的にも気温の低い時期にあたり、科学者たちが小氷期 (Little ice age) と呼ぶ時期にあたる。この時期、気温の変化に起因する食糧生産の減少により、中国と日本では大小の飢饉が発生した。たとえば、江戸時代の全国的な大飢饉は、享保・天明・天保の三大飢饉とされる。これらの飢饉をはじめ大小の飢饉は、その多くは冷害による凶作が直接の原因であった。したがって食料不足による飢饉が、捕鯨が盛んにおこなわれた起因の一つになる可能性がある。<sup>22</sup>

<sup>21</sup> 日本捕鯨協会「捕鯨の歴史」

<sup>22</sup> 田家康『飢饉をもたらした小氷期 キリストの顔も曇らせた』

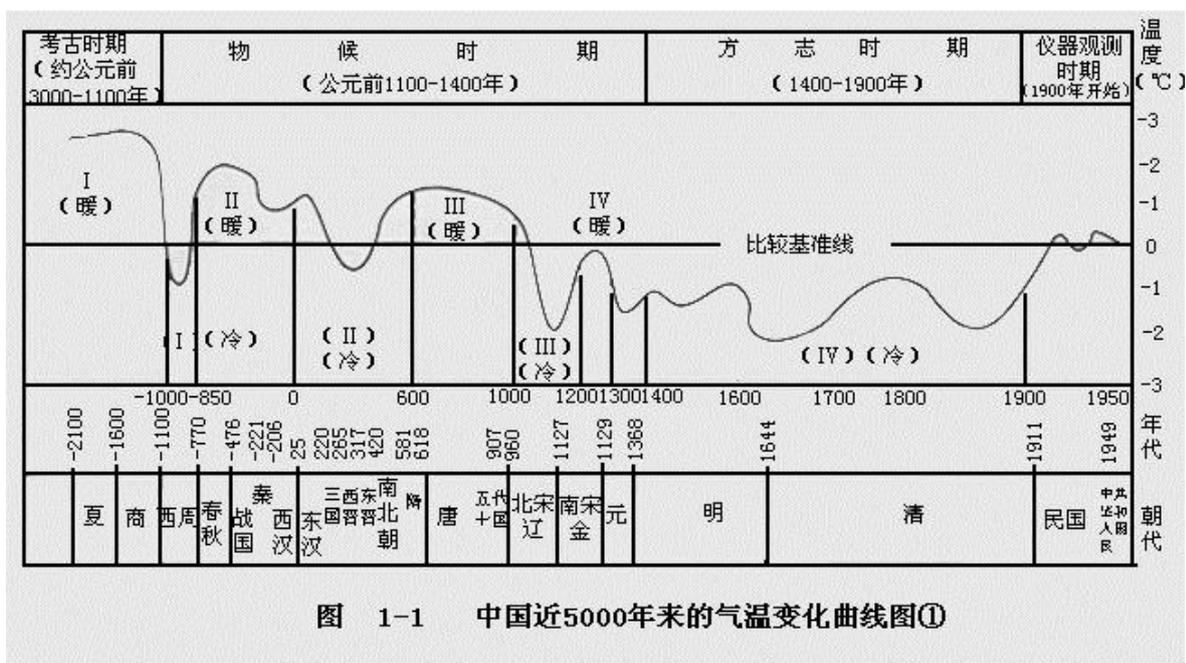


图 1-1 中国近5000年来的气温变化曲线图①

出典 『中国近五千年来的气候变迁的初步研究』

竺可楨によれば、中国の歴史上、暖冬であったのは西暦 1550 年から 1600 年、西暦 1770 年から 1830 年の間である。寒冬は、西暦 1470 年から 1520 年、1620 年から 1720 年、1840 年から 1890 年の間である。世紀別に見ると、17 世紀が最も寒く、寒冬が 14 回あり、19 世紀には寒冬が 10 回経験されている。日本の気温記録と比較すると、中国と日本の気候の変動はほぼ同じであることがわかる<sup>23</sup>。どちらでも、17 世紀にはより寒冬があったことを示している。また、この期間には、明朝の歴史上最も多くの災害が発生した。合計 1,214 件の自然災害の記録があり、洪水が 486 回、災害の中で第 1 位であり、41%を占めていた。干ばつは 434 回、35%を占めていた。その他の自然災害（イナゴの害虫、雹、疫病、風災害など）は 294 件あり、24%を占めていた<sup>24</sup>。

<sup>23</sup> 竺可楨 『中国近五千年来的气候变迁的初步研究』 p. 179

<sup>24</sup> 陈建勤 『明代水灾述论』 p. 3.

## 2.3 近代における捕鯨

### 中国大陸

近代の中国大陸においても捕鯨が行われていた。日本が中国東北部の旅順、大連を占領していた頃、1914年に日本の東洋捕鯨株式会社が捕鯨基地を設立した。捕鯨船は2隻あった。しかし、第二次世界大戦後、捕鯨操業を中止した。

1949年の中華人民共和国の成立後、水産業の発展は比較的遅く、1949年には全国の水産物生産量は45万トン、一人当たりの消費量は0.8kgであった。1953年、広東省恵陽県の澳閩港で民間による近海での組織的な捕鯨が始まった。捕鯨漁場は大亜湾であった。同年、雷州半島の徐聞県にある外羅港の沿岸捕鯨が始まったが、1954年には捕鯨が中止された。

1953年には旅大水産会社（現大連海洋水産会社）が捕鯨の準備を行い、1955年には大連金物総工場の協力を得て、初の45mm捕鯨砲が設計された。同年に45mm捕鯨砲を搭載した捕鯨船が出港して、正式に捕鯨が開始された。これは中華人民共和国の近代捕鯨の序幕となる。漁場は、遼東半島の東側にある黄海地区。捕鯨基地は海洋島に設置した。1959年までには中型捕鯨船1艘、小型捕鯨船3艘となった。1963年には、排水量229トン、1200馬力、航速力13kn、90mm砲を備えた捕鯨船が建造され、黄海まで漁場を拡大した<sup>25</sup>。しかしながら、日本が1955年から東シナ海漁場においてナガスクジラを対象にして捕鯨操業を再開したために、中国の捕獲量は大きな影響を受け、1973年にはナガスクジラの捕獲頭数がゼロになり、これ以降大型鯨類を対象にする捕鯨操業を中止した。

### 台湾

日本占領時代では台湾南部・墾丁南灣「大坂将」が台湾唯一の捕鯨基地であった。1913年に台湾海陸産業株式会社が小規模な捕鯨を開始した。1920年に日本の東洋捕鯨株式会社が台湾南部の大坂将に基地を建設し、ザトウクジラを対象にして捕鯨操業を開始したが、日本の敗戦により1945年に終了した。第二次世界大戦後、台湾の中華民国は1949年に復帰した。膨大な利益が見込める捕鯨業を重視し、政府のサポートを受けた祥徳漁業行が日本の極洋捕鯨株式会社と提携、新たな捕鯨基地を南港から5kmの距離にある香蕉湾漁港に設けたのである。1957年に台湾の祥徳漁業会社が日本捕鯨株式会社と合作して、本来の「大坂」基地を用いて捕鯨していたが、1960年に経営不振で操業を停止した。四年後、

<sup>25</sup> 王丕烈 『中国鯨類』 2012 p. 3

1964年に祥徳漁業会社は日本の小型捕鯨船を購入し、日本人の砲手を雇用して、捕鯨を再開したが、再び倒産した。1970年以降、台湾の近海の鯨類資源は枯渇し、日本から合計4隻の捕鯨船を導入して、漁場は北太平洋に移転した。鯨肉の主要な輸出先は日本であり、1982年のIWCの商業捕鯨モラトリアムの採択まで捕鯨が続いていた。また、1982年以降、商業捕鯨は禁止されたものの、民間は小型のイルカを捕獲し続けていた。1970年代以降、動物保護運動が活発しており、1990年以降、台湾政府は小型鯨類を含む捕鯨活動を完全に禁止することになった。

## 2.4 捕獲量について

### 中国大陸

1953年、広東省恵陽区澳頭港で、民間組織による大亜湾での沿岸捕鯨が開始された。当地の漁民は、7~9隻の小型ボートで構成されたチームに参加し、銛、爆発物を用いて捕殺した。合計100隻以上の小型漁船が漁獲に参入した。1953年の捕鯨開始から1960年まで、合計48頭のクジラが捕獲され、その90%は大型鯨類で、他にもコククジラとミンククジラがあったが、1961年以降、漁獲量は急激に減少し、1970年に捕鯨は完全に停止した。

1953年に雷州半島徐聞県では、コククジラを主な捕獲対象として、外羅港で沿岸捕鯨チームが組織され、1954年に終了したが、原因と捕獲数は不明である。

旅大水産（大連海洋水産会社の前身）は1953年に捕鯨の準備を開始し、1955年に最初の45mm捕鯨砲を建造し、最初の小型捕鯨船を建造した。同年に合計10頭のミンククジラが捕獲された。1959年には中型捕鯨船1隻、小型捕鯨船2隻が参入した。1963年には上海九新造船所が設計した「元龍大型捕鯨船」が採用され、1964年に7頭のナガスクジラを漁獲した。王丕烈（2012）<sup>26</sup>によると、1955年日本の九州の五島列島に設置された基地が捕鯨を再開したため、1965年以降はほとんど捕れなくなったという。

---

<sup>26</sup> 王丕烈 『中国鯨類』 2012 p. 4

## 台湾

捕鯨産業の時期は、大きく分けて3つの期間に分けられている。(1920年~1942年)、(1955年~1969年)、(1976年~1980年)。捕獲量は以下の通りである。

First period		Second period	
Year	Counts	Year	Tons
1920	29	1955	5
1921	43	1956	5
1922	45	1957	56
1923	44	1958	179
1924	54	1959	214
1925	45	1960	-
1926	48	1961	73
1927	56	1962	-
1928	57	1963	2
1929	61	1964	0
1930	47	1965	67
1931	39	1966	58
1932	40	1967	23
1933	30	1968	5
1934	17	1969	10
1935	33	Third period	
1936	20	Year	Tons/Counts
1937	22	1976-1980	2439/450
1938	17		
1939	9		
1940	10		
1941	7		
1942	6		

(出典 Chung-Ling Chen<sup>27</sup>)

台湾はIWCに加盟していないため、そのデータは国際捕鯨統計に掲載されていない。したがって、1945年以降の捕獲量には論争がある。以下は『中国鯨類』からの情報。

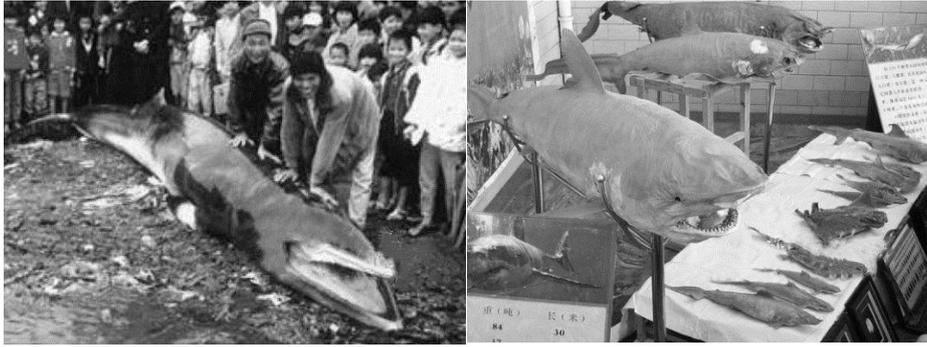
台湾の捕鯨は1955年に始まり、1957年に台湾祥徳漁業が日本から285トンの捕鯨船を購入。同年日本の捕鯨株式会社と合作して、台湾の沿岸海域で捕鯨を開始した。捕鯨基地は、台湾南部の屏東県にある。捕獲量は1957年に10頭、1958年に12頭、1959年に14頭。1960年に経営不振で操業を停止した。1964年に日本から50トンの捕鯨船を購入し、バショウカジキとイルカの漁獲を加えて、捕鯨を再開した。1980年まで、4隻の捕鯨船の捕獲量合計は下記のとおりである。

海雁号	1976-1980	806頭
朱豊号	1979-1980	282頭
吉信号	1979-1980	287頭
海华号	1979-1980	426頭

(『中国鯨類』を参照に作成)

捕獲されたクジラの種類のうち、ニタリクジラが80%を占め、ミンククジラが10%、残りはザトウクジラとマッコウクジラである。

<sup>27</sup> Chung-Ling Chen 「From catching to watching: Moving towards quality assurance of whale/dolphin watching tourism in Taiwan」 p.2



捕鯨の郷—徐聞県 出典「中国著名捕鯨、捕鯊之郷—外罗」



中国の最初の捕鯨船 出典『中国鯨類』



图1 中国第一门小型捕鯨炮（王丕烈摄）

最初の45mm捕鯨砲 『中国鯨類』



大坂将

出典「國家圖書館台灣記憶資料庫」



中華民國元總統・蔣介石が視察のため香蕉湾を訪れた。

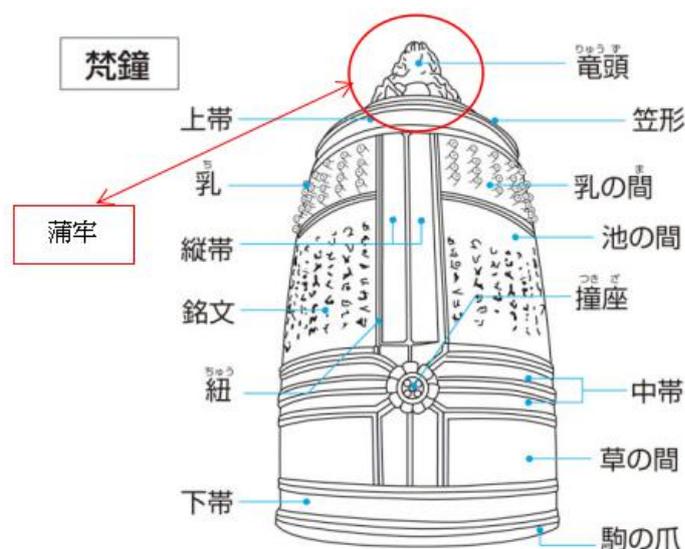
出典「國家圖書館台灣記憶資料庫」

### 第三章 民間伝承、物語

#### 3.1 中国大陸

##### 徐福伝説

徐福は、鬼谷子の弟子で、天文学や地理に精通する方士<sup>28</sup>である。徐福は何千人もの少年少女や職人を率いて日本に渡来したという伝説がある。秦の始皇帝は天下統一を成し遂げ、不老不死の追求に転じていた。徐福は始皇帝に、東海仙人が住んでいる蓬萊仙島には不老不死の薬があると進言した。そして、始皇帝はすぐに徐福を不老不死の薬を求めて探しに行かせた。しかし、莫大な資金を費やして、得るものがなく、この時は「大きな鯨に阻まれてたどり着けませんでした」と始皇帝に報告した。そこで始皇帝は大勢の技術者や若者を伴って再度船出することを許可し、ついに日本に到着し、気候温暖、風光明媚なこの土地に魅かれ、永住して、農耕・漁法・捕鯨などの技術を伝えた。秦の始皇帝が死ぬまで、徐福は帰って来なかった。



蒲牢(ほろう) (「梵鐘」の解説 出典日本大百科全書)

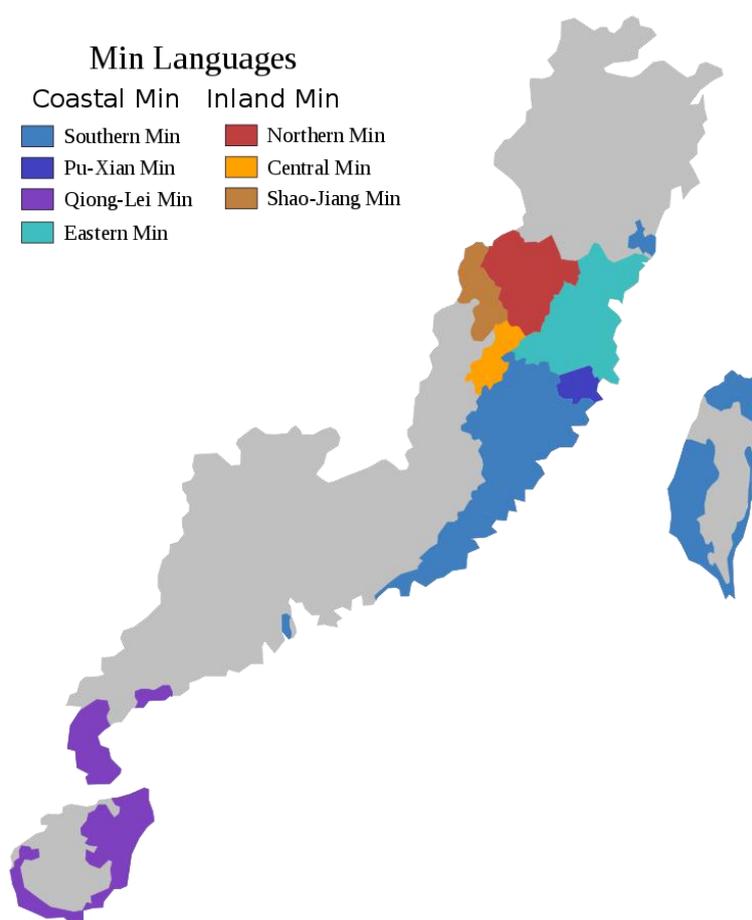
龍の第四子は蒲牢といい、形状は蟾蜍に似ている。吼えること好むため、よく鐘の上に彫られている。蒲牢は海岸沿いに住んでおり、鯨を恐れ、鯨が攻撃を始めると、蒲牢は叫び出す。昔の人は鐘がよく響くように、蒲牢を鐘を吊るす鈕に彫刻し、鯨の形状に似る鐘木を用いて叩く。より大きな音が鳴ることを期待した意味合いが込められたようである。また、梵鐘には別称がある。洪鐘(こうしょう)、蒲牢(ほろう)、鯨鐘(げいしょう)、巨鯨(きよげい)、華鯨(かげい)など。

<sup>28</sup> 中国古代の祭祀、占星術、医術などの神仙方術を行う人

### 3.2 台湾とその他の閩南地方

中国大陸が台湾との交流を開始した時期は常に論争がある。台湾の遺跡から発見された文物は、特に漢、唐、宋時代の貨幣や磁器が多い。それは古来中国大陸と台湾との密接な関係を示している。その文化交流の中で、最も象徴的なのは、元朝の至元年（1335-1340）澎湖巡検が設立されたことである。その後、台湾海峡の澎湖を經由し、両岸で頻繁な交流活動が行われている。しかも海峡の真ん中に位置する澎湖は、海峡を渡る中継点である。福建省南部閩南・泉州の海洋文化が台湾とを結ぶ橋である。

台湾語・台語は、台湾閩南語とも呼ばれる。台湾諸島と澎湖諸島で話されている固有の言語で、閩南語の泉州・漳州支族(Southern Min)に属した。閩南系の台湾人は、台湾で最大の民族である。



(Liaon98<sup>29</sup> wikimedia)

<sup>29</sup> Liaon98 <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=53046344> による

雷州半島は、中国の3大半島の1つであり、歴史的には中央王朝から遠く離れていて、唐宋以降、福建省南部からの移民が雷州半島に移住した。主要な言語は閩語の下位にある海南語と雷州語（Qiong-lei Min）である。海洋文化に影響されたことは、閩南語圏である雷州半島と台湾、福建省の顕著な共通点である。両地の文化は海への畏敬の念を抱いている。ウィトゲンシュタイン<sup>30</sup>は言語の地域性についてこう言っていた「language is a house of being」<sup>31</sup>。同一言語は、国の文化だけでなく、地域の文化を形成する重要な条件であり、方言をシンボルとして形成された文化は、文化の地域性や文化の独自性をより反映したものとなる。閩南語を通し、雷州半島の文化圏は何千キロも外れた台湾と福建省の文化圏と緊密につながっているのである。

閩南語によって形成された閩南文化圏の象徴として、あげたいのが媽祖文化であり、もともとは中国東南部の海洋文化で、古来の中原の文化とは異なる。媽祖は、航海、漁業の守護神である。歴史的な理由で媽祖文化は台湾でより多く保存されているが、これは中国大陸の媽祖文化は消滅したという意味ではない。ただし、沿岸で操業する漁民たちは、現在の一般人より、媽祖に対する親しみを持っている人が多い。それに両方ともクジラにかかわる文化や伝説が伝承されている。

例えばクジラは、閩南語では海翁／海龍翁／海公と呼ばれる。伝説によると、海翁は巨大なクジラで、昔は海の中で海竜との戦いに負けて、媽祖に助けられたから、恩返しするために海翁は毎年の春、媽祖祭（毎年3月21日頃）に参拝するという。一方、物語の由来としては、クジラの繁殖期は毎年の春であり、その時期は台湾の東側海域を通過する熱帯暖流は、海底の栄養豊富な養分を水中に運び込み、クジラやイルカは餌に惹かれて近海で繁殖するという現象にも繋がる。

---

<sup>31</sup> Martin Heidegger, Letter On Humanism, p.239



布袋劇<sup>32</sup>《海翁娶親》ポスター

(記者蔣彤雲攝)<sup>33</sup>

歌詞「天烏烏，欲落雨，海翁娶丁香欲做某，海鳥是媒人婆，海龜送禮大氣吐。蟬牽車，蠟  
 扑鼓，海鼠歡吹嚶嚶哺，蝨擯擗旗叫艱苦，虎魚紅帕帕，牽翼做蠓罩，明年予恁生一个掛鱗  
 脰...」<sup>34</sup>

(要約：空は暗くて、雨が降りそう、海翁（鯨）は丁香<sup>35</sup>と結婚しますよ。海鳥は仲人で  
 あり、亀は贈り物をします。青蟹が荷車を引っ張り、渡り蟹が鼓を叩き、虎魚は真赤にな  
 り... 中略)

<sup>32</sup> 布袋劇とは、台湾の民間芸能の一つ。人形の頭部や手足部は木製であり、それ以外の身体部は布製の衣服により構成されており、演出時は手を人形衣装の中に入れて操作する。(https://ja.wikipedia.org/wiki/布袋劇) から引用

<sup>33</sup> 亞太新聞網(https://www.atanews.net/?news=62725)。

<sup>34</sup> 物語の内容は日本の「狐の嫁入り」に似ている。台湾行政院農業委員会(https://kmweb.coa.gov.tw/)

<sup>35</sup> カタクチイワシ

## 鄭成功の伝説

鄭成功（1624-1662）は、日本の平戸で田川マツを母に 1624 年に生まれ、もともと福松という名前で、7 歳の時鄭森に改名した。父の鄭芝龍は、当時の台湾を拠点とした海洋商人であり、清軍が侵入した後、鄭芝龍は福州で唐王<sup>36</sup>を擁護し、旧明政権を建立した。唐王は、鄭森に明の国姓である朱姓を与え、ついに鄭成功と呼ばれた。当時の人々は、彼を国姓爺（こくせんや）と敬称したという。1661 年には、数十年前から台湾で活動していたオランダ植民者を撃退し、台湾で南明政権を樹立して、中華文化を中心としての地域が確立された<sup>37</sup>。また、日本は鄭氏台湾と呼ぶ。彼の不思議な経歴からすると、鄭成功は、一衣帯水の日中関係の長い間の歴史的交流の当事者とも言えるだろう。

鄭成功については、中国大陸の小中学校の教科書にも掲載されている。鄭成功は日中の混血であるが、清王朝の侵略に抵抗し、漢民族を正統にした南明政権を受け継いだことで、鄭氏は民族英雄と称す。彼の最大の功績は、オランダ人入植者を台湾から追い出したことである。台湾では、鄭成功の功績を賛える。彼に関する物語は多くあるが、ここで彼と鯨にかかわる物語のみ取り上げたい。

鄭成功は、台湾海を横断する伝説の海の人物として、生から死までの伝説が海から切り離せないため、彼の伝説は多くの特別なもので形作られてきた。東海の長鯨に生まれ変わったというのは伝説の一つである。

「鄭成功，倭産也。誕降之前一日，天晴霽無片雲。薄暮，忽有雷破土窟而出，煙霾漲天，人對面不可辨。……天明，謀者言海中有鯨鯢長數十尺，……雞鳴風始定，魚亦不見，相譁以為妖怪云。是夕，成功生，人奇之。」<sup>65</sup>

（要約：鄭成功は、日本に生まれた。出産の先日、広く晴天で曇りなし…。問者によれば、海で大きなクジラが現れた…。夜になると、鄭成功が生まれた…。中略）

（台湾紀事卷一鄭事紀略<sup>38</sup>）

この伝説によると、鄭成功が生まれたとき、奇妙な光が現れ、母親はクジラが彼女のお腹に飛び込むことを夢見た。鄭成功が「鯨」から生まれ変わる様子を描いたものである。一

<sup>36</sup> 隆武帝、南明の第 2 代皇帝

<sup>37</sup> 「國家圖書館台湾記憶」により

<sup>38</sup> 吳子光《台湾紀事》，台湾文獻叢刊第 36 種 p. 35。

方、鄭成功の死の伝説は、「嵐の海」や「雷雨」とも表現されている。また、鄭成功が「鯨」に乗って海に往生することも言及されている。

「再問：「何時得滅？」元曰：「歸東即逝。」辛丑，成功攻台，紅毛望見一人峨冠博帶，騎鯨魚從鹿耳門游漾而入。後功諸船果從是港進。癸卯年四月間，功未病時，有副將楊明夢成功帶冠騎鯨魚，由鯤鯨之東出於外海。覺而大異，與人述之，不數日，而成功卒。」<sup>67</sup>

(要約：略... 副将の楊明は、鄭成功が冠を被りクジラに乗って海岸の東へ出港したと夢見ていた。驚愕し、周りの人に知らせた。数日後、鄭成功が死去。)

(臺灣外紀/卷 27<sup>39</sup>)



鄭成功夫婦像<sup>40</sup>

鄭成功の伝説は、福建、台湾などの地域が海洋文化を具象化した例である。それは大陸の中原の農耕文化とは違う。昔から中国の農耕文化では支配者や英雄を龍に擬える通例がある。龍が空を飛んで雲を起し雨を呼ぶことができるからである。そして、庶民は風雨順調、農作物が豊作になるように龍神に祈る。しかし、実際に龍がどのような様子をしているのか、はっきりとした模様はなく、さまざまな動物の体の部分がつなぎ合わされることがよくある。一方、海辺に住む人は広大な海への畏怖の念を抱き、未知なる大海への憧憬を持つ。それを征服するため、くじらのような現実に存在するものを通して、英雄を表現

<sup>39</sup> 江日昇『台湾外記』 p. 405

<sup>40</sup> (来来源：鄭成功夫婦像. 國家圖書館臺灣記憶系統. 2022-01-14<<https://tm.ncl.edu.tw/>>)

する。それは、海の中で最も大きな動物であるクジラは、台風や嵐を恐れずに自由に航行することができ、海に依存する漁師たちと深い関わりを持っているからである。鄭成功のような神話や伝説を持つ人物は、ある程度現実の概念から切り離されており、むしろ台湾の人々が海の英雄に執着した結果なのではないだろうか。

#### 先住民の伝説

また、台湾の先住民、アミ族<sup>41</sup>の物語について紹介したい。「Maciwciw<sup>42</sup>は海に出て漁をする。彼はある小さな島で火をつくって、魚を焼くつもりだったが、島が徐々に筏を離れていて、クジラの背中に立っていることに気づいた。くじらは彼を背負って西に泳ぎ、岸に近づいて、女護島<sup>43</sup>という島に着陸し、彼は島の女族人に囲まれて連れ去られた。豚舎に閉じ込められ、草、樹皮を食べさせられた。数日後、彼は刀を見つけ、それを使って柵とつるを切り、浜辺へ逃走する。最初のクジラが泳いできて、彼を故郷に連れ戻した。」クジラの恩に報いるために、村人たちは肉粽（もち米と肉を植物の葉で包んだちまき）を海に投げ込み、クジラに餌にやった。その後、毎年恒例の儀式を行う、アミ族の海祭になった。

---

<sup>41</sup> 台湾先住民のなかで人口が一番多い民族。

<sup>42</sup> アミ語、人の名前。

<sup>43</sup> 海上にある女性のみが暮らしている島である。

## 第四章 なぜ中国では大規模な捕鯨が行われていないのか

### 4.1 中国政府の捕鯨に対する立場

中国の捕鯨に対する立場の矛盾は、主に国際と国内の2つの側面に反映されている。国際面では（IWCの決議案での投票）では、中国政府は捕鯨を支持する立場を明確にしていた。例えば、中国政府は2005年の外務省での記者会見で、中国政府は持続可能な利用を提唱し、捕鯨問題について次のように答えていた。

[2005年6月16日の中国外交部劉建超報道官の記者会見のうち日本関係の一问一答は次の通り。

問 今週、国際的動物福祉保護組織が中国外交部に書簡を送り、日本の捕鯨拡大の努力を支持しないよう求めた。この組織は、中国は過去5年間、60の決議のうち59で日本を支持したとしているが、正しいか。中国は捕鯨を行わないのに、なぜ日本を支持するのか。

答 ここで捕鯨問題に対する中国の基本原則を説明したい。それは積極的に保護、合理的に利用し、十分な科学的データに基づき、慎重な研究と各国の協議一致を経て、クジラ資源を、限度をもって利用するというものである。]<sup>44</sup>

中国国内の世論面においては非常に微妙である。捕鯨に対してどのような立場をとるべきか。鯨を捕獲していない中国は当然「捕鯨中止」に賛成していると思込んでいる中国人が多いのである。しかし、それは単純な話ではない。実際、2000年以降のIWCの会議では、中国、韓国やロシアなどの近隣諸国も日本の「科学的捕鯨」提案を支持してきた。例えば、2006年のIWC年次総会では、日本が「総会の投票方法を公開から非公開に変更すること」、「IWCによる小型鯨類の保護の停止」「南極海のクジラ保護区指定を解除する」などを提案し、中国が賛成した。しかし、中国は「商業捕鯨の正常化」を求める「セントキッツ・ネイビス宣言」<sup>45</sup>の投票を棄権した。

水産庁資料「セントキッツ・ネイビス宣言（要約）」

- 1) 国際捕鯨取締条約の目的は、「鯨類の適当な保存及び捕鯨産業の秩序ある発展」であり、IWCは、単に鯨を保護するのではなく、適切な管理により乱獲を防止すべき。
- 2) 商業捕鯨モラトリアムは、その採択時、科学的必要性が示されていなかった。

<sup>44</sup> <https://www.mfa.gov.cn/ce/ce.jp//jpn/fyrth/t200202.htm>

<sup>45</sup> 日本の国際捕鯨委員会（IWC）からの脱退と商業捕鯨の再開に至る政治外交史的考察（続編）。p.6 引用

- 3) モラトリアムはもはや不要。安全な捕獲枠算出方式 (RMP)により、鯨類資源の持続的利用が可能であることが科学的に合意されている。
- 4) IWC は 14 年間にわたる交渉でも、RMS (鯨類の持続的な資源管理のための改訂管理制度) を完成出来なかった。
- 5) 鯨類による魚の捕食が沿岸国の食料安全保障に脅威であり、鯨類資源管理は生態系管理の一環で考える必要がある。
- 6) 自己中心的な NGO が脅迫を用いて各国の方針を曲げさせようとしていることは容認できない。
- 7) 資源状況に拘わらず捕鯨再開に反対することは条約違反である。
- 8) 持続可能な管理方式の採用によってのみ、IWC が崩壊の危機から救われる。

最初に捕鯨を支持する理由を紹介しよう。まずは、自国の排他的経済水域への考慮である。クジラは大食漢という説がある。1頭の大型クジラは1日に2トン近い餌を食べる。さらに問題となるのは、一部のクジラには採餌の特徴が2つある。1つは、持続可能な水産資源を守るため、「成年魚を捕って稚魚を残らせること」という原則に反して、小さな稚魚やエビを食べることが多い。もう1つは、クジラやイルカは大規模な群れで移動することが多く、常に漁場の漁業資源を一掃し、経済的に重要な魚種を絶滅させてしまう可能性がある。

他方、「人間が魚を狩る前に、なぜクジラは魚を食べ尽くさなかったのか」と問いかけなければならない。自然は調和的に共存するのではなく、波のように整うということを理解することが大切である。大げさに言えば、原始的な状態では、どの地域でも食べ物が足りなければ、古代の人類の部族は餓死し、大量の移住を余儀なくされることになる。

人間が介入しない「自然な状態」では、クジラのような大型捕食者は、漁場を破壊した後、自然に立ち去るか餓死するかして、その後かなりの期間を経て漁場が回復して、またクジラが戻ってくるのが自然の摂理である。現代の漁業の資源状況では、クジラがこのようなサイクルを繰り返すことはもはや許せない。現代の漁業では、資源が持続可能となるように休漁期間などを設置している。毎年、漁獲対象魚の繁殖が集中する時期には漁業を閉鎖し、海洋漁業資源の持続可能性を守ることができる。一方、鯨類の場合はその逆になる。ドキュメンタリーでクジラの群れが餌を探す様子を見たことがないだろうか。小魚をまとめて追い込み、集中的に狙うので、その場で群れが全滅してしまうこともある。したかつて、「クジラは人間の仲間だ」というよりはむしろ競争関係なのではないだろうか。

以上の理由を考えると、発展途上国である中国としては、クジラが無制限に繁殖するようになれば、中国の沖合漁業に経済的損失をもたらす可能性があることを考慮しなければならない。

では、なぜ中国は「セントキッツ・ネイビス宣言」の投票を棄権したか。その理由については、中国は商業捕鯨に対する懸念を抱いているからではないかと考える。中国のアプローチは、日本の捕鯨活動がIWCが既定する枠組みに制限されるようとしている。IWCで日本の捕鯨提案を支持することで、日本の調査捕鯨をIWC協定に基づいた容認の範囲で行わせて、同時に中国が自国の「捕鯨権益」を保持するという策略である。すなわち、中国が日本の捕鯨を支持することは、調査捕鯨の範囲内、「限度をもって利用する」ことである。日本がIWCを脱退し、商業捕鯨を再開する中で、現在中国国内で捕鯨業に参入できる漁業団体や関連組織がなく、さらにクジラには回遊性があるため、中国側は鯨に関連する漁業協定がない商業捕鯨活動は、自国の利益を損なうと認識する可能性がある。筆者は、予見可能な未来において、東アジアの諸国「日中露韓」が、摩擦を発生させないように、地域的な捕鯨の合意を検討することを提言したい。

他方、中国の改革開放以来、経済発展の過程で成長に伴うゆがみも顕在化してきており、環境問題（長江水域の汚染、船舶の騒音）、混獲などことによる鯨類資源の枯渇は原因にもなる。新中国の鯨類研究は比較的遅く始まった。中国の発展の過程で、1980年ごろから密猟、乱獲、水質汚染によって引き起こされる生態学的問題は非常に深刻になってきた。現在、中国の本土ではほとんどの小型鯨類が絶滅の危機に瀕している。そのため、近年、中国政府は鯨類の保護を開始した。具体的な措置は、イルカを「国家重点保護野生動物リスト」に入れることと、イルカとその他の絶滅危惧種が生息する海域を保護し、漁業禁止区域を設定することである。例えば、2019年に中華人民共和国農業省は「揚子江流域の主要水域での漁業禁止と補償制度の確立のための実施計画」を発表した。保護地域を含む本流と重要な支流では漁業の撤退が完了し、10年間の漁業禁止が暫定的に計画されている。中国の国営メディアも反捕鯨の宣伝を推進している。筆者の記憶では、2000年代初頭中国のテレビ番組は捕鯨を「血まみれの捕殺」というイメージの映像で見せていた。勿論、日中の政治関係も要因としているが、突き詰めていうと、このような動きは捕鯨を支持している中国政府の立場にはそぐわない。むしろ、持続可能な利用ではなく、資源保護の理念を促進する手段だと考えられる。また、漁業に関する政策が監視取締制度などの整備不足による管理の困難のため、政府は多くの場合「一刀切」にする。一刀切とは、複

雑な事情に対して個々の状況を考慮せず、同一の方式でばっさりと処理することである。例えば、特定の絶滅危惧魚種の管理の混乱のため、全部の関連水域の漁獲(養殖業も含む)、遊漁活動なども一切停止することがよくある。

本節の最後に、中国が IWC に参加する理由についても言及したい。主に二つ説がある。Elspeth Huxley<sup>46</sup>によると、中国の決定は世界自然保護基金 (World Wildlife Fund ) との約束に影響された。その内容は「中国が IWC に参加することで、WWF がパンダ保護区に 100 万ドルの資金を支援する」というものである。

もう一つの説は、当時台湾には、加盟国として国際捕鯨委員会に加入する意向があったが、中国は、正統政府は一つと主張し、台湾を IWC から排除するために IWC に参加したという。また、WWF が資金を支援するという説は、中国のネット上にも細かな断片的文章があるが、その真偽の判断が難しいと考えられる。台湾の説については、「中国動物法网」<sup>47</sup> に乗せられている。

#### 国際捕鯨管制公約

声明

本公約 1946 年 12 月 2 日訂于华盛顿，并于 1948 年 11 月 10 日生效。

1980 年 9 月 24 日中国外长致函该公約的保存国美国国务卿，通知我国决定加入国际捕鯨公約及国际捕鯨委员会；同时声明，台湾当局盗用中国名义对上述公約的承认和加入的申请是非法无效的。1980 年 10 月 20 日美国国务院复函，确认中华人民共和国从 1980 年 9 月 24 日起成为本公約当事国。

(要約)

#### 国際捕鯨管理条約

声明

本条約は 1946 年 12 月 2 日にワシントンで制定され、1948 年 11 月 10 日に発効した。

1980 年 9 月 24 日、中国の外務大臣は、条約の寄託者である米国国務長官に文書を送り、国際捕鯨条約の締結と国際捕鯨委員会に参加する決定を通知した。同時に、台湾当局が上記の条約の承認と加入を申請するために中国の名前を盗用したことは違法であり、無効である。1980 年 10 月 20 日、米国国務省は、1980 年 9 月 24 日から中華人民共和国がこの条約の締約国になったことを確認する書簡で返答した。

<sup>46</sup> "Insight: Conservationists' tactics now used by whalers". New Scientist. 16 June 2006.

<sup>47</sup> 《国际捕鯨管制公約》[http://www.jthf-animallaw.cn/article\\_info/aid/1007.html](http://www.jthf-animallaw.cn/article_info/aid/1007.html)

## 4.2 歴史と地理的背景

中国が大規模な捕鯨を行っていないという主張は、非常に一方的なものである。前述の通り、福建省から、広東省の西南部、雷州半島まで、中国の東南水域には大規模な捕鯨の痕跡がある。したがって、地域別に見ると、そのような結論を得るのは根拠が不十分である。

中国の国土面積は960万km<sup>2</sup>。沿岸部の総面積は133万4,000km<sup>2</sup>で、総国土面積の14%を占めている。近年の沿岸部の経済発展に伴い、人口に占める割合は40%を超え、現在も増加の傾向がある。しかし、古代中国では、特に南部地域は開発されておらず、「未開」「野蛮」とみなされていた。南宋時代まで、古代中国の経済の中心は中央平原周辺にあり、中国が最盛期を迎えた唐代の経済・文化・政治の中心は、黄河中下流の洛陽と長安（現在の西安）にあった。当時の唐では、現在の広東省や福建省などの南東部沿岸地域を「嶺南」と呼び、囚人を追放する場所としていた。日本でもよく知られている韓愈、柳宗元、宋代の蘇軾（蘇東坡）も嶺南に流された。

中国で捕鯨活動が記録された地域は、主に東南海岸部であった。この地域の人口の組成は、客家人、潮州人、雷州人、閩南人である。これらの漢民族の支流には大きな特徴がある。それは農業と深い関わりがあるとしても、あえて海洋へ進出することである。そして、沿岸部に移住し、土地を持っていない移民たちは、最初海を介して様々な商品の取引を行い、海を介して市場や居住地が開発された。現在でもこれら移民の子孫は世界の至る所にいる。福建省の泉州港は、両宋時期の中国で最大の港であり、海のシルクロードの起点であった。史料によると、五胡十六国時代<sup>48</sup>中原地方から大量の漢民族の移民が東南海岸にやってきて、次第に東南沿岸部の開発を開始した。南宋時代以降、北方からの遊牧民の侵入により、経済の中心が南下する傾向が強くなった。南宋の首都は臨安（現在の杭州）であった。江南各地の経済が繁栄し、経済・文化・政治の中心となっていった。明朝初期までに、当時の永楽帝によって首都が南京から北京に移されたものの、南方地域、特に長江以南の経済的地位はもはや揺らぐことはなくなった。

中国では捕鯨は行われていないという固定観念について筆者の考えは次のとおりである。一般的に捕鯨は海洋文化の象徴として用いられることが多い。しかし、中国の支配的な文化は中原の農耕文化である。古来より内陸の人は捕鯨どころか、鯨すら見ていなかった

---

<sup>48</sup> 華北に興亡した五胡と漢人の国家の総称。

た人が多い。そうであっても、中国が海洋文化を生み出さなかったわけではない。逆に、中国は海洋文化を内包した大陸国家である。産業革命に入る前に、捕鯨という人類活動の前提として、海洋文化の影響を受けるかどうかは重要な先決条件であると考えられる。ここで筆者は、海洋文化を「海による利益の創出」と「海との共生」と定義する。つまり、これには伝統的な漁業以外、具体的に海を通じた人口輸送や貿易なども含まれている。また、筆者は捕鯨文化についての理解は「食」、「食料以外の素材としての利用」、「伝承」などの組み合わせと定義するが、近代盛んであった鯨油だけをとる捕鯨も、捕鯨文化にも含まれると考えられる。現在の世界では、当時の鯨油のみを得る捕鯨活動に対する批判が多い。しかし、「過去」という視点を見れば、それも人類社会の進歩の象徴といえるのではないだろうか。

上述のように、漢民族は嶺南地方の海辺に移住し、海洋文化の影響を受けて、捕鯨文化を発展させてきた。なぜ、同じ沿岸地域である江南地方に捕鯨文化が出現していなかったのか。要するに以下の二点が考えられる。

第一に、その地域で捕鯨を行う外部環境である。座礁鯨の記録だけでは、その地域の資源量の全体像を判断することができない。当時の人口、交通、食料の消費量を考慮し、座礁鯨が増えることで、クジラを漁獲する意欲が減退するかどうかを判断しなければならない。また江南地方に多数の河口域、淡水湖が存在し、豊富な漁業資源がある。淡水魚は主要な食糧源であり、意図的に捕鯨を行う必要性はさらに考察する必要がある。

第二に、江南地域は、古来より絹産業、茶栽培、稲作などの農業文化が発達していた。歴史上、江南は重要な米の生産地である。つまり、農民のメンタリティが圧倒的に強いのである。

次に雷州半島での捕鯨文化形成に関する理解であるが、雷州半島も農業を中心とした地域文化である。農業は、安定した生活環境と文化創造のための物質的な基盤を提供する一方で、地元の人が農耕思想に制限され、雷州半島から海に向かって飛び出すことを躊躇した。そのため、漢の時代から海外との経済・文化交流を行ってきた湛江<sup>49</sup>は、1,556キロメートルの海岸線と多くの優れた港を持っているにもかかわらず、外に向かって開かれた海洋文化を発展させたり、海洋文化を農耕文化の影から飛び出させ、より優位な、あるいは同等な地位を与えることができなかったのである。雷州半島の住民の多くは自

---

<sup>49</sup> 雷州半島は湛江に管轄される。

分の家に固執している。近代社会においても、西欧列強の侵攻の中で、その矢面に立った広府人<sup>50</sup>、閩南人が西洋の先進文化を吸収して、海への開拓に挑戦する。同じ背景を持っている雷州半島では、農民が武装して抗議活動を行ったことを除けば、いろいろな分野、特に知的分野では静かであった。これも雷州半島の捕鯨文化が広まっていない原因だと考えられる。三方を海に囲まれているという絶好の条件が、彼らに海を渡ることを駆り立てるわけではなく、近世西洋の植民地文化が強く迫っても、彼らの海に対する素朴な理解と利用を変えることはなかった。雷州半島での、海の探索の中止は、近代清帝国が統治した中国の縮図ともいえる。農耕文化は平和で安定した生活をもたらす一方で、人々は広い世界に目を向けなくなった。捕鯨は単に腹の満足だけではなく、鯨油をめぐって列強と競争することで、貧弱な農耕社会から工業化への模索の出発点でもあった。目先の財産に安住し、革新的な文化の足跡を制限してしまった。このように、農耕文化に支配された雷州半島は、文化創造における海の重要性を制限するだけでなく、やや保守的であることを示している。

前述の筆者の調査では、中華人民共和国の建国以来、渤海や東シナ海でも捕鯨が行われていた。捕獲場所は大連の港湾水域を中心とした。雷州半島と大亜湾も捕鯨が記録されていたが、ほとんどは当地の漁師集団による活動で、この2つの地域での捕鯨の目的については、明確にされていない。しかも、全体的には捕鯨活動が持続されていた期間も少ないとわかっている。東北三省が建国初期の中国の重工業基地であったことを考えると、大連港周辺での漁獲の多くは工業的な目的として使われたと考えられる。現地捕鯨に参加していた王丕烈の「中国鯨類」によれば、中国が捕鯨を中止した理由は、日本と韓国の大規模な捕鯨に影響されて、資源量が大幅に減少したためと述べていた。

その中止の理由を歴史的な背景と結び付けると、(例えば1950年が朝鮮戦争、1958-1960年が大躍進時期、1960-1963年の3年間の飢饉、1966年-1976年が文化大革命など) いずれも多かれ少なかれ、捕鯨産業に影響を与えたと言えるだろう。石油革命が誕生以来、鯨油は工業からの需要が消滅し、戦後、鯨を食料に供した日本とは異なる。中国には昔から「民以食为天(人の食は天なり)」という言葉がある。飲食大国である中国では、果たして鯨肉の嗜好がないだろうか。

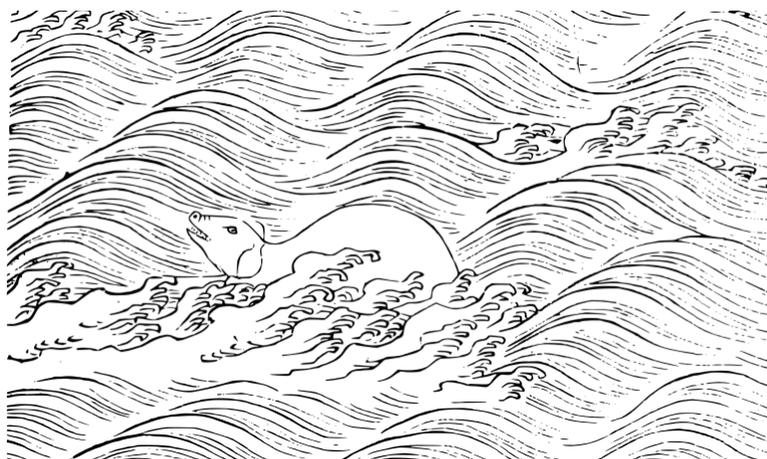
---

<sup>50</sup> 広州の別称。

### 4.3 鯨食文化について

中国では鯨肉を食べない理由としては様々な説がある。その中で最も広く流布しているのが、「鯨肉は不味いから」という固定観念である。しかし、こういった理由は根拠に乏しいのではないだろうか。そもそも、「味が美味しいのか、不味いのか」は、客観的に判別するのが難しい。人によって味についての理解も異なるのである。さらに、人間の味覚は不変のものではない。

先に述べていたように、中国で記録されている捕鯨は主に東南沿岸部に集中しているが、鯨食文化は東南沿岸部でのみ発生したというわけではない。一般的な大型のヒゲクジラとは対照的に、イルカなどのハクジラ類については、実は中国全土の海、湖、大河川などの水域に沿った場所に一度は食文化が存在していた。中国語では、小型のイルカ類を「海豚」と呼ぶ。なぜそう呼ばれるかという、豚に似ているからである。



「江豚図」 『欽定古今圖書集成』

『本草綱目』を引用して、さらに説明を添える。

「海豚、江豚，皆因形命名。咸腥味如《水牛肉》。无毒。」（イルカ、豚の形に似て名付けられた。味は塩辛くて「水牛の肉」に近い。）

「『岳阳風土記』<sup>51</sup>：“江上漁人取江豚…。然至腥臭不可近。惟取脂油以供点照，土人間有能食者。”（江の漁民は江豚を捕る…。においが生臭くて近づかない、油だけをとる。灯りを点ける。地元の人には肉を食べる）

『岳阳風土記』では、江豚の肉は「生臭い」と述べているものの、地元の人には食べる習慣があるとしている。一方、『本草綱目』では、イルカの肉は水牛の肉に近いと述べている。

<sup>51</sup> 宋・范致明『岳阳風土記』。北宋湖南省の歴史、地理、風習についての本

日本の『大和本草』<sup>52</sup>でのくじらとイルカ肉についての記録は以下の通りである。

ス皮ハ黒シ其内ニ白肉アリ又白肉ノ下ニ赤肉アリ味  
 有好否冬春捕之春月最多シ海鯨ノ腸ノ名多  
 シ百尋ト云長キ腸アリ可食凡鯨ノ油貧士賤  
 民以爲燈油甚利民用○海鯨性熱肥膩多膏油  
 食之生熱動風發瘡生瘰多食難消化能傷脾胃  
 病人及有脾積瘡疥者婦人有崩漏帶下之病者不  
 可食其近尾白肉味最好塩藏日久者夏月食之  
 味美能峻補脾胃肥健於人虛冷無積滯人宜食  
 止久瀉若新病濕熱盛者不可食  
 龍涎 本草綱目龍條下有之曰是羣龍所吐涎沫

： 近尾白肉、味最好、塩藏日久者、夏月食之、  
 味美…  
 中略  
 要約、尻尾に近い脂身の味は最も良い、長時間塩藏し、  
 夏に食べると美味…

『大和本草卷之十三 魚之下 海鯨』<sup>53</sup>

和品  
 人煎シテ油ヲトル形豚ノ如シヒアリ足ニ似タリ尾ニ  
 岐アリ肉ハ赤クシテクシラノ赤肉ノ如シ肉ニ油多カ  
 ラス味モクシラニ似タリ鱗ナシヒヨリ形少キイサシ  
 毒ナレ本草ニテリ  
 ツカマ 若狭ノ大寫ノ海ニアリ他處ニナレト云長三四  
 寸ヨリ一尺ニイタル鯨ニ似テ少セハシ鯨ノ類ニアラス  
 味ヨシ腥カラス鮮トナレテ尤美ナリ無毒  
 キタコ 長二三尺無鱗色ハ淡黒斑アリ尾ニタナレ  
 頭大ニ尾小ナリ下腮少長シ目小ニナキカ如身ハ  
 下ルカラス長崎ニアリ或曰鱧ナラント云ハ非也本草ノ

： 肉は赤くして、クジラの赤肉の如し、肉には、油多か  
 らず、味もクジラに似たり、鱗なし、シビより、形小さい  
 毒なし、本草にあり  
 中略…

『大和本草卷之十三 魚之下 海豚』

<sup>52</sup> 1709年（宝永7年）に刊行されて、貝原益軒が編纂した本草書である。  
<sup>53</sup> 和装本、九州大学附属図書館蔵

この味に対する認識の異なりは、それぞれの作者の描写する傾向が要因だと考えられる。ここで、筆者はさらにいくつかの例を挙げたい。中国の貴州・四川・湖南でよく食べられている「魚腥草<sup>54</sup>（ぎょせいそう）」という野草で、漢字の通りに、「魚の生臭いにおいがある草」である。しかし、地元では非常に人気がある。それ以外の地域では全く食べられない人が多い。これは食文化が地域性に強く影響されることを示している。北欧の伝統的な食べ物で、「シュールストレミング」という缶詰がある。塩漬けのニシンの缶詰で、その強烈な臭いから、「世界一臭い食べ物」と評される。アイスランドではサメ肉を発酵させ、臭みも強いのである。同様に、日本の納豆も発酵食品であるが、食べられる外国人は少なかった。しかし、食の嗜好や習慣は一旦養成すれば、日本に長期滞在の外国人の中にも食べるようになった人もいないだろうか。

本題に戻ると、資源量が激減したことが理由でイルカ食習慣がなくなったのが要因と推測される。中国の本土のすべてのイルカは絶滅危惧種であり、「国家重点保護野生動物リスト」に入っている。しかし、密漁の厳罰化にもかかわらず、2017年3月14日、山東省栄城市で水産業を営んでいた被告の朱氏は、電話連絡で北京市豊台区で水産業を営んでいた被告の杜氏にイルカ4匹を売った。2人の被告人は、4匹のイルカをそれぞれ150円で取引したことで検挙された。翌日、郵送でイルカを受け取った杜氏は、北京の豊台にある水産店で1キロあたり8元の価格で販売した直後、豊台区警察に逮捕された。



判決文の公開部分 (出典 新京報)<sup>55</sup>

<sup>54</sup> ドクダミ

<sup>55</sup> 「北京买卖江豚第一案 两人被判缓刑」

90年代に「中華人民共和国の野生生物保護法」が確立してからも、江豚の密漁事件はまだ頻繁に発生している。同一事件で、2012年温州市の滄浪県にある農家市場で、イルカが解体された写真がインターネットで炎上した。目撃者によると、老人はイルカのそれぞれの部分を切り分けて1キロあたり60～100円で売っており、肉や脂身はすべて買い取られたという。それ以外、海辺で座礁した鯨が地元の住民らによって解体され、鯨肉を奪い合ったというニュース<sup>56</sup>がある。現在、座礁鯨を国有財産に変更する立法が進んでいる。

実際には、中国の国内で多くの人々はイルカを別種とみなして、イルカは鯨類だと思わない人が多い。したがって、中国では鯨食文化がないという説が成立しないと考えられる。



「解体された江豚」

(出典 weibo 新聞)<sup>57</sup>

---

<https://baijiahao.baidu.com/s?id=1604089375025073413&wfr=spider&for=pc>

<sup>56</sup> 「福建搁浅巨鯨魚肉遭村民哄抢」

<http://news.sina.com.cn/s/2008-01-17/074813275514s.shtml>

<sup>57</sup> 「温州一菜场当众宰壳江豚」 <https://weibo.com/1729736051/z9pmtj0CS>

## 第五章 考察

### 5.1 鯨食文化の保全について

#### くじら文化に対する理解

文化とは何か。「文化」という言葉は、小さいものから大きいものまで、また狭いものから広いものまで、常にさまざまな意味を持っている。昔中国人は、読み書きができること、学舎に行ったこと、教育を受けたこと、知識を持っていることが「有文化」とされていた。学術的には、文化とは、物質的文化、制度的文化、精神的文化などであり、つまり「人間が生み出した物質的・精神的成果の総体」と定義されることが多い。広い概念となっているが、現実には私たちが重視する文化は思想・理論、宣伝・教育、報道・出版、文学・芸術の上演、文化遺産の管理などからなる分野を指している。くじら文化についても同様である。広義には、くじら文化とは、人類とクジラとのすべての関わり合い中で生まれたものとされている。風習（鯨食、祭祀）、信仰（鯨塚、鯨神社）、創作（鯨踊り、鯨唄）など、また水族館、ホエールウォッチングなどのレジャーでの関係も含む。

中国の春秋戦国時代に、「無為自然・一切斉同」を重んじる超俗的な思想家である荘子は、『逍遙遊』にくじらのペックスラップ（胸びれたたき）の姿をこう描出した。

「北冥有魚，其名為鯤。鯤之大，不知其几千里也。化而為鳥，其名為鵬。鵬之背，不知其几千里也；怒而飛ぶ，其翼若垂天之云。是鳥也，海运則將徙于南冥。南冥者，天池也。」

（要約：北の<sup>くら</sup>冥き海に怪魚がいた。その名前を<sup>こん</sup>鯤という。鯤の大きさは、幾千里あるか分からないほどに巨大である。鯤が変化して鳥になる時、その名前を<sup>ほう</sup>鵬という。鵬の背中の大きさは幾千里あるか分からないほどに巨大である。鵬が怒って勢い良く飛び立てば、その翼はまるで天に垂れている雲のようになる。季節風で潮目が変わって海が動く時、鵬は北の海から南の海へと移ろうとする。南の冥き海とは、天が生み出した巨大な池である。）  
荘子はクジラの習性を仮託し、権力・財力・名誉などに執着し、自己の本質を見失う人間を、世俗から解放させたい、自由無碍な境地に到達したいという願念を示している。

日本の江戸時代後期では、浮世絵師の葛飾北斎が『千絵の海・五島鯨突』で、長崎県五島列島沖でクジラに囲まれた数十隻の船が激しく揺れ、湾に乱流をはねかける壮観な光景で、小さな漁師が巨大なクジラと強烈に対比され、海に挑む誇りの絵画を描いている。上記のクジラの表現の例は、それ自体が文化ではなく、文化を表す手段として使われている。われわれの現実生活でも同じで、文化は常に人間社会に繋がったり、還元されたりするも

のであり、決して架空化されたものではない。また「文化が生きている」とみなされている。文化を名詞のみとしてとらえず、また、文化を表すために既成の物につなげて表現するのではない。過去・現在・未来の人間の活動を踏まえて、そのプロセスに焦点を当てて理解する。要するに、文化を理解することは人を理解することだと考えられる。

鯨文化について、著者は、捕鯨と鯨食がこの中で最も代表的な文化であると考えている。まず、捕鯨又は鯨食が非常に強い地域性を示している。そしてこれらの地域の特徴を通して、人々の生活様式を理解するのに役立つ。すなわち、文化の発生は該当する文化が発生した地域と相互関係がある。例を挙げると、内陸部に住む人が穀物などを作り、家畜を飼育し、動植物食料の生産を生活基盤としているが、島に住む人が地理的な条件に制限されて、彼らは海への開拓しか狙わない。一方、現在の科学は大きな変化の中にあり、技術の進歩によっていずれにせよ、人間の生活様式が大きく進歩している。しかし、これは資源を効率的、持続的に使うことにつながるとは限らない。特に現在の世界では、多文化共生を推進しているのである。全体として、鯨の文化は広く普遍的な文化ではないが、その特別な地域性やニッチ性を持っているからこそ、くじら文化を理解すること、つまり鯨資源に恵まれた人への理解は大切なのではないだろうか。

## 5.2 文化論の役割とその限界

本節では、くじら文化の保存とその役割をさらに掘り下げてみる。最初に、捕鯨文化を解釈することが必要である。「捕鯨文化の起源」、「捕鯨文化によって何がもたらされるのか」、そして最後に、「くじら文化を守ることについて」。

まず、捕鯨文化とはどのようなものか。捕鯨活動の起源については、最も可能性が高いのは食料としての利用である。日本は、6世紀に伝来した仏教思想の影響で、動物の殺生を禁じる風潮が高まり、天武天皇年間（675年）には「肉食禁止令」という法令が發布された。江戸時代まで、日本人の多くは魚介類を食べていた<sup>58</sup>。そして、江戸時代初期に組織による捕鯨が始まった。その時期に捕鯨業が盛んであったのは、当時の人々が、哺乳類であるクジラを魚類と認識したからである。漁獲した鯨は様々な用途に使われていたが、当時の人々は主に主要な食料の供給源として利用し、筆者が前述のように、捕鯨は理由なく生まれたものではないのである。

また、中国の犬食文化も同じように、中国の戦国時代にはすでに犬の飼育と犬食の習慣

---

<sup>58</sup> 米食文化研究所 <https://kome-academy.com/roots/meat.html>

があった。例えば、《梁惠王章句上》<sup>59</sup>では、「鶏豚狗彘之畜，无失其時，七十者可以食肉矣」（要約：鶏、子豚、犬、大型豚、これらの家畜は季節を失うことはなく（給餌と繁殖）、70代の人には肉を食べることができる）。犬の肉食の文化の由来は、農耕文明と非常に大きな関係がある。遊牧民族とは異なり。農耕民族にとって犬はそれほど重要ではなかったが、古代中国の百姓は耕牛を殺ることが禁止された。その理由について、両者の役割の違いによるものである。農耕民族にとっては、耕牛が田畑を耕す労働力となる。一方、遊牧民にとっての犬は、牧畜、狩猟など、生業に欠かせない仲間である。

捕鯨文化によって私たちに何がもたらされるのか。捕鯨問題は、実はさまざまな問題の象徴でもある。食物の多様性や食料自給率、各国の国民が自分で食べ物を決める権利など大きな問題につながっている<sup>60</sup>。文化的な観点からも同じで、捕鯨文化が受け継がれるかどうかは、他人の意志や価値観で左右されることなく、その国の国民が判断することが大切である。伝統文化を守ることは、グローバリゼーションの過程で世界と緊密に結び合うなかで生まれる独自性や固有性に注目するべきで、決して世界的に平板化したものとはなってはならない。

どうやってその文化を守るか。文化の伝承を継続するためには、社会、政策などの外部の世界から文化を継承するための環境、いわば「土壌」を提供する必要がある。それぞれの文化には独自性があるから、一概に複製することはできない。これによって一步一步実践していくこととなる。ただし、一部の人の訴えや限られたプロパガンダの手段のみでは、社会全体の意識を変えることは難しい。例えば、日本人の大多数は、日本製の製品に対して高い信頼性を持っている。その意識を高めるために努力したのは一部の企業側だけではなく、国産製品の価値を守るためにすべての国民が関わっている。国産の製品を信頼し、多くの国民が購入を望むようになったことから、企業が産業のアップグレードに貢献するようになった。企業側が良いものを作って社会に還元する。このような好循環を通して、企業と消費者、伝統文化と人々の関係がより密接に結びついていく。最終的には、こういう内在的な文化の影響力が全体に波及することで、既存の伝統を受け継ぐことができるようになる。

また、文化の役割は万能ではない。それは主に2つの側面に反映されている。第一に、文化はあくまでも人間によるものである、ということがある。より良い継承のためには、

---

<sup>59</sup> 『孟子：梁惠王上七』

<sup>60</sup> 森下 丈二、『捕鯨の行方』 <https://www.tokyo-np.co.jp/article/3083> から引用。

多くの受け取り手が必要となる。新しい文化であろうが、存続危機に瀕している伝統的な文化であろうが、それを一般な大衆にどのように受け入れさせるかは難題である。それに「文化も生きているもの」だから、社会の変化とともに変化している。過去の捕鯨業の衰退により、クジラ食品産業も停滞している。現在、舶来食品や新式な食文化は社会のあらゆる年齢層に溢れており、伝統文化のタグだけに頼って人々を感動させることは困難である。これは文化論の欠点となる。文化の継承の過程で、トレンドに沿っていないものは破棄する場合もある。つまり、社会にうまく溶け込むために、文化はそれ自体を改革しなければならない。

第二に、捕鯨文化は日本の国民・民族全体の文化として、強い地域的な属性を示しており、部外者にはなかなか理解できないケースが多い、ということである。まず「良い文化」と「悪い文化」は客観的に存在しているのか。良い文化は確かに社会から受け継がれる価値がある。しかし、悪い文化の例といえば、食人文化はご存じだろうか。中国では薬用としての人肉食で、「胎盤食」を食うという風習がある。古来からの健康法として今も受け継がれている。しかしながら、倫理違反や血液による感染症の危険性があることで、多くの人はそれを愚かな文化とみなしていた。実際にはこういう現象は自然界においては全く珍しくない。自然界に生活する哺乳動物は、出産後に母体が胎盤を食べることがよくある。現代の科学の研究において、プラセンタ（胎盤抽出物）を用いる医薬品は更年期障害・乳汁分泌障害などの病症に効果があるとわかっている。日本で1990年代には高級化粧品や育毛剤、滋養強壮ドリンク剤にヒト胎盤エキスも使われていた<sup>61</sup>。日本では2003年の法改正により、ヒト組織由来の製品を使用した場合に記録保管の必要が生じ<sup>62</sup>、診療を伴う医薬品以外では家畜の胎盤が使われるようになった。だからこそ、その「悪い文化」は直接に捨てるのがいい、あるいは自らの改革を行わせるほうがいい。状況に応じてしっかり把握しなければならない。とはいうものの、「良い文化」と「悪い文化」とはなんだろう。その基準を判断することは非常に困難である。地球の地表面積の71%を占めるのは海であり、陸域は29%で、陸地は地球の表面積の3分の1未満に過ぎない、さらにその陸域の中にも人類の生存に適さない地域が総面積の半分を占めている。それにもかかわらず、北極圏の極寒地帯、ヒマラヤの高原地帯、そして北アフリカの極度の水不足の砂漠地帯は

<sup>61</sup> 東裕二「胎児のベッド」『朝日新聞夕刊』、1994年3月25日、5面。

<sup>62</sup> 「医薬品・医療機器の適正な使用により、より安心できる医療の提供を」。厚生労働省（2003年）。

人間の足跡を残している。

「生肉を食べる人」という蔑称で呼ばれた、北極圏に住むエスキモー人は気候の性質上、穀物は食べず、カリブー、クジラ、アザラシの生肉だけを食用する。これらの地域に住む人の文化は、われわれにとってそれが「悪い文化」といえるだろうか。以上は文化論の限界だと考えられる。すなわち、自分が属している文化の中心にいと、他の文化を客観的に見ることができなくなり、無意識に他の文化に優劣がつけられているのである。

これによって、さらに導き出したことは、捕鯨問題に関する国際的な議論において、文化論を用い、日本として自国の文化を守る主張を聞き手に納得してもらおうとする場合である。これについて、IWC 日本政府代表・森下丈二教授も指摘されている。

「では日本における捕鯨は文化の一環として捉えられるのでしょうか。実は、私自身は、IWC での議論で捕鯨支持のために捕鯨文化論を使ったことは一度もありません。文化というものを、捕鯨を許すための条件とすれば、一部の発展途上国が将来鯨肉を利用したいと考えたときに、彼らへ捕鯨の門戸を閉じることになってしまうでしょう。文化というものを基準として捕鯨再開を主張してはいけないと思っています。もちろん、文化を保護することはとても大事なことです。それには異論は全くありません。ただし、それを使って捕鯨を容認するように IWC で求める、または説得する材料にするのではなく、文化であろうが無かろうが、海洋生物資源として持続可能な形で利用することが科学的にも法的にも認められていることを訴えていくのだと思います。」<sup>63</sup>

---

<sup>63</sup> 森下丈二「捕鯨をめぐる対立の構造」2018.3

### 5.3 総括

最後に、中華圏における捕鯨史及び中国政府の捕鯨に対する立場を明らかにし、サブタイトルの質問「なぜ中国では大規模な捕鯨が行われていないのか」について、本章で総括する。さらにそれぞれを踏まえたうえで捕鯨産業の将来展望について提言したい。

古代及び近代中国における捕鯨活動は、東南沿岸部に集中している。閩南民系とその下位語にある海南語と雷州語 (Qiong-lei Min) など、異なる閩南語方言区出身の中国系移民の集落では、クジラに関する多くの民俗文化が生まれていた。捕鯨の伝統もこれらの集落に結びついている。文献、史料によると、中国の捕鯨地域は主に澎湖 (ほうこ) 諸島を中心とする台湾島の南西部と広東省南西部の雷州 (らいしゅう) 半島周辺であった。明代以降、雷州半島で捕鯨が行われていたという明確な記録がある。これらの地域の住民は、クジラの鯨油、肉、龍涎香の利用史がある。中華人民共和国の初期にも大規模な捕鯨は行われていたが、全体的に発展が遅かったため、又は1965年以降近海の鯨資源の枯渇により、持続時間が短かかったのである。中華民国の捕鯨業は、日本占領時代の影響に加えて、その独特の地理的位置から、20世紀前半には発達した捕鯨産業を生み出したが、資源の枯渇や反捕鯨運動、動物保護の圧力などの理由で、小型鯨類を含むすべての捕鯨が中止された。中国国内の小型鯨類資源の枯渇により、中国政府はIWCで捕鯨を支持する姿勢を表明しているにもかかわらず、中国国内では反捕鯨の宣伝が強化されている。政策の不一致を持ち込むことは、中国政府が「合理的な開発」と「持続可能な利用」という方針に積極的に取り組んでいることを示唆している。また、一般的には、宣伝によって、多くの中国人が「中国政府が捕鯨を支持していない」という固定観念を持っている。

捕鯨文化の文化遺産としての観点を踏まえて、将来の捕鯨産業の文化像の形成を助言したい。第一に、より多くの一般消費者が鯨食文化の保護に参加できるように、一般消費者に普及の可能な鯨の文化産業を確立することである。第二に、諸外国NPOの「洗脳」に対応し、捕鯨文化の正当性を築きながら、国民の意識面を強化することである。

また、捕鯨や鯨食の歴史文化が残る地域のみ流通させることは、産業全体に不利が生じるものである。著者は、現在の鯨食文化があえて既存の食文化に挑戦することを提言したい。今後の鯨肉の流通は、かえって大都市を入口として行われることになる。大都市での流通の際には、産業の高度化に携わる人々が多く、多くの市場データによって、タイムリーな対応や問題点の把握が可能となる。

食文化としては、普通の牛肉や豚肉などと同様に、産地の表明、肉の等級付けなどが重要であるが、要するには情報の普及である。たとえば、鯨肉の様々な部位の味を消費者に伝えること、売場でチラシの配布などによって、初めて鯨肉を食べようとする消費者に対して、「どの部位は食べやすいのか」「調理法はどうすればいいのか」などの誘導が大切である。

最後は、鯨食の文化を世界に広めるために、外国人観光客を迎える成熟した市場を作ることが重要である。鯨食文化を外部に開放して広めることは、将来の鯨類資源の持続的な発展にも寄与すると考えられる。

## 5.4 今後の課題

反捕鯨運動の出現は、1970年代に欧米が主導した環境保護主義や動物保護主義とは不可分の関係にある。同様に東洋と西洋の動物倫理観の差異とも言える。動物倫理とは、動物に対する人間の道徳的義務に焦点を当てた学問であり、その理論は西洋で発展し洗練されてきた。主要な内容としては、動物権利、動物福祉などである。また人間と実験用動物、農業用動物、野生動物、ペット動物などとの関係も網羅されている。東洋文化の一つとして、日本の動物に対する倫理観は、仏教、儒教、神道に代表される東アジアの哲学的、宗教的な生命観にまで遡ることができる。それは人間、動物、環境の一体論を唱え、人間が万物を利用する際には博愛の精神を強調することである。

西洋哲学における動物倫理概念は、東洋社会が強調する世間万物に対する平等や正義とは異なる。最も代表的な西洋の動物倫理では、動物を客体として扱い、人類は独自の感情と意識を持っているため、動物を支配する権利と義務が付与されていると考えられている。日本では仏教や儒教の上に立ちながら、独自に神道教が誕生してきた。アニミズム思想の影響で、古来の日本では自然を征服するのではなく、万物に対する畏敬の念が生じる。人間と自然の関係を神道教の視点から分析し、日本文化では、人間と動物がより密接的な関係にあることが指摘された。また、東洋の動物倫理観は、人間と動物の関係、物質や進歩を求める人間と環境問題との間の矛盾を調和するために、不可欠な役割を果たすことが出来る。

さらに、東アジアの国々に共通の動物倫理観が形成された原因は、「山川草木国土悉皆成仏」という仏教の平等思想が大きな要因となっている。一方、欧米では、動物倫理と科学の発展との間の矛盾、動物解放主義による過激行為と現代科学の発展との対立が発生した。近代欧米を中心とした産業革命は、全人類社会に巨大な進歩をもたらしたにもかかわらず、世界各地が欧米化を加速する過程の中で、欧米の動物倫理観との不適應などの問題が深刻になっている。日本および東洋社会における動物倫理への認識の変遷と、東西洋の動物倫理や世界観の違いは、さらに考察する必要がある。

## 日中くじら用語

### ①日本語

いさなとり いさなとり  
鯨取／勇魚取 いさなどりとは、鯨をとること。

### 日中完全同義関係

かいしゅう  
海鱸 海鱸とは、昔はクジラの別名。

鮪／海豚 イルカ

りゅうぜんこう  
龍涎香 龍涎香とは、クジラの腸内に発生する結石であり、香料の一種である。

### 日中部分同義関係

げいげい  
鯨鯨 鯨鯨とは、「鯨」は雄クジラ、

「鯨」は雌クジラ。

またさんしょううお（山椒魚）、中国語と同義

### ②中国語

海鯨 海鯨とは、クジラの別名。

海翁／海龍翁／海公 海翁（hái-ang）、海龍翁、海公とは、主に福建、台湾などを中心  
に使われる閩南語の言い方（びんなんご、ミンナンご）

《澎湖紀略》<sup>64</sup>説：「鯨魚，一名海鯨，俗呼為海翁」

---

<sup>64</sup> 《澎湖紀略》澎湖紀略卷之八

## 参考文献

- 森下丈二 2002年3月『なぜ鯨が座礁するのか』 p.44-54
- 謝婧、下園知弥、宮崎克則 (2015) 「明清時代の中国における鯨資源の利用」 p. 1-14
- 新納 遼子 (2017) 「日本における鄭成功像の形成：明治期の新聞記事を中心に」
- 史泉 125 A20-A33 2017年1月
- 森下丈二 「捕鯨をめぐる対立の構造」
- 鯨研通信 447号 2018年3月 p.11-17
- 岸上伸啓 「捕鯨に関する文化人類学的研究における最近の動向について」国立民族学博物館研究報告 35(3): 399- 470 (2011)
- 李宜靜 「The Legend of the Whale in Taiwan Literature of the Qing Dynasty」康寧學報 14 (2012) 67-80
- 王丕烈 (2012) 『中国鯨類』
- 竺可楨 (1972) 「中国近五千年來氣候變遷的初步研究」
- 陳建勤 (1990) 『明代水災述論』
- 蔡惠如 (1998) 『與鄭成功有關的傳説之研究』
- 『《漢書》卷二七《五行誌中之下》』
- 唐・唐封演『封氏聞見記卷八・大魚腮』
- 宋・范致明『岳陽風土記』
- 明・歐陽保 (1990) 『雷州府志』書目文獻出版社 [199-] 日本藏中國罕見地方志叢刊所藏館 25 館
- 清・吳盛藻 (1811) 『雷州府志』
- 清・江日昇『台灣外記』
- 清・胡建偉 (1771) 澎湖紀略
- 川口長孺 (1828) 『台灣鄭氏紀事』
- 『《太平御覽》卷八七〇引《三秦記》』
- 『小琉球漫志卷七』
- 『澎湖紀略・澎湖記略卷之八』
- 『大和本草卷之十三 魚之下』
- [海南島鯨類擱淺記錄數據庫(1993~2015年)]

## 参考サイト

日本哺乳類学会 2021 年 12 月 24 日

<https://www.mammalogy.jp/list/index.html>

日本捕鯨協会「捕鯨の歴史」

<https://www.whaling.jp/history.html>

世界哺乳類標準和名目録 <https://www.mammalogy.jp/list/index.html>

「講座 | 邱仲麟：中國歷史上的鯨豚擱淺」 復旦大學 2019 年 11 月 29 日。

<http://history.fudan.edu.cn/24/3e/c7806a205886/page.htm>

森下 丈二、『捕鯨の行方』2019 年 6 月 8 日

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/3083>

Commission Meeting Voting Records - IWC | Archive

<https://archive.iwc.int/pages/search.php?search=%21collection29772&k=>

《漢書》卷二七《五行誌中之下》

<https://ctext.org/han-shu/wu-xing-zhi-zhong-zhi-xia/zhs>

國立臺灣海洋大學「108 年度臺灣周邊鯨豚族群調查計畫」2019 年 12 月 19 日

<https://www.oca.gov.tw/ch/home.jsp?id=394&parentpath=0,299>

朱仕玠 小琉球漫誌

[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru04/ru04\\_04767/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru04/ru04_04767/index.html)

「走進曾經——捕鯨之鄉徐聞外羅港，鯨魚骨骼標本至今為廣州文化公園鎮館之寶」

[https://view.inews.qq.com/a/20200408V06A9K00?tbkt=D&openid=o04IBAJ2oEyZKYuvYsFz\\_zk1Ia\\_rM&uid=](https://view.inews.qq.com/a/20200408V06A9K00?tbkt=D&openid=o04IBAJ2oEyZKYuvYsFz_zk1Ia_rM&uid=)

「中國著名捕鯨、捕鯊之鄉——外羅」2010 年 4 月 18 日

<https://wenku.baidu.com/view/c30ecaa30b75f46527d3240c844769eae009a3ba.html>

『封氏聞見記卷八・大魚腮』

<https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=375469&remap=gb>

野生動物保護協會『中國鯨類多樣性及保護現狀』騰訊網 2021 年 1 月 31 日

(<https://xw.qq.com/amphtml/20210130A022RS00>)

駱和國『湛江捕鯨史話』「湛江日報」2008 年 1 月 15 日

[http://szb.gdzdaily.com.cn/zjrb/html/2008-01/15/content\\_1261633.htm](http://szb.gdzdaily.com.cn/zjrb/html/2008-01/15/content_1261633.htm)

「國家圖書館台灣記憶資料庫」<https://tm.ncl.edu.tw/index>

記妖 <https://www.cbaigui.com/post-6328.html>

「北京買賣江豚第一案 兩人被判緩刑」2018年6月24日

<https://baijiahao.baidu.com/s?id=1604089375025073413&wfr=spider&for=pc>

中国動物法網 2021年03月8日

[http://www.jthf-animalaw.cn/article\\_info/aid/1007.html](http://www.jthf-animalaw.cn/article_info/aid/1007.html)

中华人民共和国农业农村部

「我国主张对鲸类资源积极保护与合理利用」2003年07月01日

[http://www.moa.gov.cn/xw/zwdt/200307/t20030701\\_96389.htm](http://www.moa.gov.cn/xw/zwdt/200307/t20030701_96389.htm)

中华人民共和国农业农村部

「农业农村部办公厅关于加强海洋哺乳动物保护管理工作的通知」2021年7月28日

[http://www.moa.gov.cn/nybgb/2021/202108/202111/t20211104\\_6381368.htm](http://www.moa.gov.cn/nybgb/2021/202108/202111/t20211104_6381368.htm)

「90年前辽东捕鲸作业全程实拍」2021年10月22日

<https://xn--90www-xk1hna47w10gltcy96b0yhuvojob258n2svdde2b.laozhaopian5.com/minguo/1817.html>

央视网「鲸伤 透视日本捕鲸内幕」2011-02-11

<https://tv.cctv.com/2011/02/11/VIDE1355600032805884.shtml>

2005年6月16日の中国外交部劉建超報道官の定例記者会見

<https://www.mfa.gov.cn/ce/cejp//jpn/fyrth/t200202.htm>

## 謝辞

本論文の作成にあたり、主指導教員の森下丈二先生、副指導教員の稲本守先生に深くお礼申し上げます。修士の二年間、終始適切な助言を賜り、丁寧に指導して下さいました森下先生に、深く感謝します。

また、東京海洋大学の先生方に感謝の意を表します。